

関東学院 学院史資料室 ニュース・レター

No.19

2016.3

学院のキリスト教教育と
音楽（パイプオルガン）特集

目次

関東学院大学礼拝堂とパイプオルガン	1
キリスト教教育と礼拝	2
パイプオルガンオーバーホール作業見学・製作者による解説	4
「キリスト教と音楽 中心的な二つの流れとパイプオルガン」	7
「関東学院とわたし」 加納政弘先生に伺う	11
「十字架の下に立つ霞ヶ丘教会」 パイプオルガン設置の由来	12
大学礼拝堂にパイプオルガンを寄贈する	13
関東学院と賛美歌（その1）.....	15
チャペルコンサートにまつわる思い出	17
「きよきところをつくれ」 関東学院大学礼拝堂の歴史と意味	18
新しくできたチャペル	20
室の木礼拝堂パイプオルガンについて	22
学院内の礼拝堂と礼拝、宗教行事	24
学院史資料展2015「建学の精神と校訓『人になれ 奉仕せよ』の教育」	28
編集後記&学院史資料・情報提供のお願い	35
関東学院と賛美歌（その1）16頁からの続き.....	36



関東学院大学礼拝堂（左：外観、右：内部） 1989年完成当時

パイプオルガン 1990年設置当時

大学礼拝堂の献堂式は1989年10月6日（木）午後3時から松本昌子宗教副主任の司式にて挙行された。

パイプオルガン献納記念特別演奏会が1990年3月31日（土）に行われた。

大学礼拝堂概要

一階 チャペレン室、集会室
二階 礼拝堂

構造 鉄筋コンクリート
仕上 外壁コンクリート打放し
屋根 銅版葺

建築面積 268.690㎡
延床面積 491.245㎡
（一階 226.405㎡、二階 264.840㎡）

キリスト教教育と礼拝

関東学院 学院長 小 河 陽

八景キャンパスのチャペルに設置されているパイプオルガンは、今年で設置後 25 年が経過し、パイプの痛みやフイゴの革の劣化等が重なって、ここ数年は故障や不具合が多発する状態になってしまいました。その都度対応に苦慮していた大学宗教教育センターは、もはや時々の応急的な修理ではなくて、オーバーホールが避けられない時期にきている、と判断せざるを得ませんでした。新しいパイプオルガンの購入も選択肢の 1 つでしたが、現在のパイプオルガンが本学 OB と OG から在学生への総力を挙げての至高の贈り物として導入された経緯に鑑みて、制作者である草苅徹夫氏の草苅オルガン工房に依頼して、これを解体して総点検し、適切な補修や改造を施すなどの抜本的なメンテナンスを行うことで、再び本来の素晴らしい音色を響かせるパイプオルガン演奏が可能な状態を今後も可能な限り維持しつづけることを選びました。夏期休暇の期間を利用してオーバーホールの作業を行ない、その間の 8 月中旬には、関東学院大学社会連携センターの主催で「パイプオルガン設置 25 周年記念特別講座」を公開講座の形で開講し、①オーバーホール作業の見学と制作者草苅徹夫氏による解説、②植木紀夫氏による「キリスト教と音楽」の講演、③そして本学職員である菊池友子さんによるパイプオルガンの演奏会を 100 名ほどの受講者を得て楽しむことができました。その解説と講演記録が本号のニューズレターで紹介されています。

1987（昭和 62）年 2 月に、大学六浦キャンパス再配置マスタープランが理事会で決定され、著しく老朽化していた旧大学の礼拝堂とその関連諸室を一新して、「本学がキリスト教主義による教育を行う大学であることを、キャンパスに学ぶ人に知らせること、そして信者でない学生にも礼拝堂という宗教空間を体験してもらうこと」という機能を持たせるべく、本学のキリスト教教育の中心施設として新しく礼拝堂を建設する計画が立てられました。その際に、この礼拝堂という建物の役割をより効果的にするために、「燦葉会」が創設 60 周年記念事業として、その礼拝堂に設置するパイプオルガンの寄贈を計画立案して募金活動を行ない、日本各地で活躍されていた OB と OG からの熱意あふれる寄付金が集まりました。この寄付金で、国内にある草苅オルガン工房で製作された純国産のパイプオルガンが購入され、1990 年 3 月に献納されたものが、今回オーバーホールされるパイプオルガンです。

オルガンの導入に際して、「燦葉通信」第 25 号（1990 年）で、当時の燦葉会会長三根 守氏は「パイプ（笛）の音は…上手に演奏されると、神の栄光を賛美するよ

うであり、魂が清められると言うか、揺すぶられるような感動を覚え、人間に先在している信仰心が甦ってくるように感じられる。それは、近頃のしらけ時代に最も欠けた『聖なる』真正な感動、低俗な考えが洗い清められ、創造者と交信し易い、素直な敬虔な心になる」、と記しておられます。

確かに、人間形成のためには広い意味での宗教心を持つことが重要であると考える人は数多く、またその宗教教育にはオルガンは欠かせません。オルガンは、中世以降のヨーロッパでは、リベラルアーツと呼ばれる自由七科のうち、クワドリヴィウム（四科）における音楽を体現する楽器でもあったのですが、特に、キリスト教会とともに驚異的な発展を遂げた楽器だと言われています。それは、1) 音を持続的に出すことができるというオルガンの特徴は、神を賛美することの持続性につながると考えられ、また、2) 誰が弾いてもある程度同じように音を出すことができるという特徴は、誰でも同じように神を賛美できるという理由からでした。とりわけ宗教改革後のプロテスタント教会においては、万人祭司説に基礎づけられた礼拝の原則が「そこにいる全員が歌う」ということにありましたから、ときに数百人ものかたがたが歌う賛美歌のための伴奏を奏でることのできる力強く大きな楽器が必要とされ、また、その音楽自体もそれまでの典礼にふさわしい形式的で静かで厳かな音楽から解放されて、より自由に華やかにという変化が望まれましたから、その必要を満たすに適切な楽器だと見なされて、小さなオルガンから大型のパイプオルガンへと発達してきたのです。日曜礼拝のために会堂に集い、オルガンの伴奏に伴われて賛美歌を歌うことで、人々はしみつつ信仰心を養われ、それは週日の日常生活を支える活力ともなっていると推測できます。

オルガンとパイプオルガンの歴史や仕組みの解説は専門家に委ねるとして、私は聖書の中でも、神礼拝と賛美は音を奏でる楽器と密接に結びついていたことに注目しておきたいと思います。出エジプト記 15 章には、紅海の奇跡を体験したイスラエル民族が神を賛美して歌ったことが記されていますが、20 - 21 節によれば、それは小太鼓によって音頭が取られていたことが分かります。この後、40 年間にわたる荒野の放浪が続くのですが、共同体を呼び集めたり、宿営を旅立たせたりするために、銀製のラッパが 2 本作られた、と言われています（民数記 10：2）。

その原語は「ハツォーツラー」ですが、ヨシュアによるエリコ攻略に始まるカナン定着後に現れるのは

「角笛」と訳される「ショーファール」です。いったん消える「ハツォツラー」は、ダビデの時代になってから主の契約の箱の前で主を賛美する楽器として再び出現します。両楽器共に、イスラエル民族の間で神賛美の楽器として用いられていたことは、「ラッパを吹き、角笛を響かせて、王なる主の前に喜びの叫びを上げよ」と記す詩篇 98 篇 6 節から知ることができます。

ダビデと言えば、「神の霊がサウルを襲うたびに、ダビデが傍らで豎琴を奏でると、サウルは心が安まって気分が良くなり、悪霊は彼を離れた」（サムエル記上 16:23）という記事が思い起こされますが、ギリシア神話にも、その豎琴の響きは、森の動物のみならず森の木々や岩までも魅了したと言われるオルフェウスも伝わっていて、音楽は人間が喜びに心躍り、悲しみに打ちひしがれる時、ごく自然な心の表現として、声に出して歌い、楽器を手に取り、あるいはそれに耳を傾けるということが起るのでしょう。神殿において、神を賛美するために様々な楽器が用いられたようです（詩篇 150:3-5）。

ダビデ・ソロモン時代には神を賛美するために壮大な合奏隊や詠唱者が組織されたようです（歴代上 23:5、下 5:12、9:11 他）。様々な楽器の演奏を伴ったこの騒々しいまでの神殿における神賛美の有り様は、旧約預言者たちによって、否定的に言及されるようになります。「お前たちの騒がしい歌をわたしから遠ざけよ。豎琴の音もわたしは聞かない」（アモ 5:23）。「わたしはお前の騒がしい歌声をやめさせ、豎琴の音が再び聞かれることはない」（エゼ 26:13）。

それゆえ、原始キリスト教の神賛美に影響を与えたのは、ユダヤ教神殿祭儀における神賛美の形式というより、むしろそれへの反動とさえ言える、非常に静かに執り行われたユダヤ教シナゴグにおける神礼拝であったと考えるべきでしょう。キリスト教がヘレニズム世界に浸透してゆき、その影響が大きくなっても、ヘレニズムでは楽器を重用する儀式は見られませんでしたから、エフェソ 5:19 に「詩篇と賛歌と霊的な歌によって語り合い、主に向かって心から誉め歌いなさい」と記されているように、まさに「語り合う」ことが可能と考えられたような、専ら歌声を中心とした静かな礼拝であったように思われます。歌声のみの音楽はあらゆる芸術の中で、最も物質的でなく、霊的な陶醉をもたらしてくれるものと受けとめられたのでしょう。

しかし、すでに触れたように、喜怒哀楽と言った心の動きを音楽的な調べで表現することはごく自然なことでありましたが、旧約聖書やとりわけ黙示録の影響を受けてのことでしょうが、徐々に神礼拝と賛美において果たす楽器や声楽の役割の理念が、あるいはトランペットやハープや聖歌隊による整然たる神賛美という概念が、育まれていきました。その動きは、紀元 600 年ごろにグレゴリアン音楽院をローマに開設すること

へと導き、その大きな影響下で、紀元 800 年ごろにはオルガンが発明され、和音の発展が可能となって、現代的で西欧的な音楽へと展開する道が切り拓かれることとなった、とされています。こうして、キリスト教は音楽を偉大な芸術として作り上げていったのでした。

創立以来今年で 131 周年もの伝統を持つ関東学院の建学の精神がキリスト教の精神であることは、関東学院に関わるすべての人々が心にとどめて、学院の歴史の節目節目でこれを想起し、新たに捉え直してゆく仕方で継承されていくべきものだと思います。神礼拝と賛美に伴奏する楽器としてのパイプオルガンのオーバーホール有机会に、この建学の精神を再確認しておきたいと思います。

それは、グローバリズムや国際化が社会的にも日常的に語られる現状においては、市場原理を拡大解釈して教育を語ってはならない、と警鐘を鳴らします。関東学院の標榜する教育は、既存の社会の「全的な」肯定の上には立ってはおらず、「優秀な技術者を輩出して日本の産業発展に役立てよう」とか、「グローバル人材を育てて国際競争力を高めよう」というような目先の利益にとらわれた教育ではなく、より普遍的な人間的価値に目覚めさせる、本質的な教育として提示されなければなりません。それは、あるべき社会には現存社会（＝古い人間が形成する社会）に対する批判的対峙が根底に潜んでおり、それに対するオルタナティブな社会の在りようを標榜しています。時にそれは、日本の利益のための異文化理解ではなく、むしろ日本人が無意識的に肯定している価値や思想に気づかせ、批判的に日本を見直し、改革していく、それゆえ場合によっては社会の目先の利益と考えられるものと対立することもできるような人材を育成する教育でなければならないと思います。

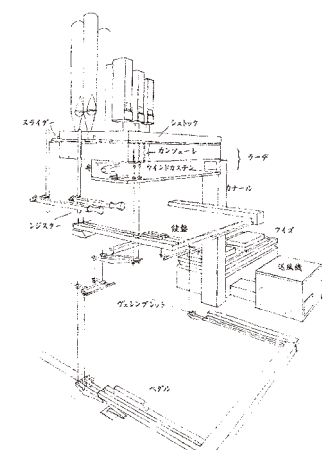
このような人間は、お互いに隣人たる人間（Mitmensch）関係の中で営まれる教育現場での厳しい訓練と、そうしたあらゆる人間の営みを超越し相対化することのできる高みへと魂を誘う瞑想とが相俟って、初めて生まれるように思われます。チャペルという宗教的空間においてパイプオルガンの奏でる魂を揺さぶる調べに覚醒させられて、私たちは自分の体と手足が営む事柄の意味を問うことへと誘われ、そもそも人として生きることの意味の発見へと導かれていくのではないか、そう私は思います。パイプオルガンの奏でる厳粛で崇高な音色の音楽に包まれるチャペルが、そのような魂の上昇をもたらしてくれる場としての役割を果たしてくれることを希ってやみません。

関東学院大学パイプオルガン設置 25 周年記念特別講座より 「パイプオルガンオーバーホール作業見学・製作者による解説」

草薙オルガン工房代表・オルガン製作者 草 薙 徹 夫



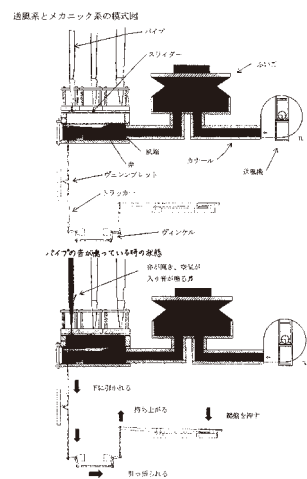
オルガンの構造の概念図



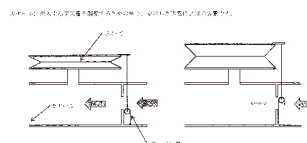
ね、パイプオルガンというのは名称のとおりパイプが、パイプと言うより笛ですね、笛を鳴らす楽器です。これは中のパイプ1本です。これは笛ですから、口で吹くと鳴ります。簡単です。これは誰でも技術を要さなくても吹けば単純に鳴るものです。尺八みたいに難しいことはないですね。こういうものがたくさん中に入っています。笛なものですから、ある見方をするとパイプオルガンは管楽器です。ところがパイプオルガンにはもう1つの側面がありまして、パイプオルガンは鍵盤で弾く楽器でもあるから、別の分類方法では鍵盤楽器といえます。鍵盤楽器といえば代表的なものにピアノがあります。余談になりますがピアノは弦楽器です。もともとは竖琴を鍵盤で弾けるように工夫されたものがピアノです。パイプオルガンのほうは、鍵盤とパイプの間に操作がいろいろついていて、鍵盤を弾くと鳴るようになっていきますから、パイプオルガンにはいくつかの要素があります。いっとう上にパイプが並んでいます。そして箱の上にパイプが並んでいるので

すけれど、その箱のことをここではラーデと書いてありますが、ちょっと準備が悪くて、ラーデというのはドイツ語なのですが、我々は通常、風箱（かざばこ）と言っています。その実物がここにあるものです。このオルガンには全体で4つの風箱がありますが、それと鍵盤があります。そしてその下の横のほうにフイゴとか、送風機があります。パイプですから風を送って鳴らす必要があるんで風が必要なんです。送風機の中にはモーターがあります。昔は手や足で風をこう、人間がシュコシュコ送っていたのですが、現代ではモーターで風を起こして、それをフイゴという袋に一旦貯蓄して、それから改めてカナルという導風管またはダクトといいます、ダクトを通して風箱の中に風を導くようになっていきます。それがなかなか分かりにくいんですけど、風箱の中はかなり小さい部屋がありまして、その中に弁が並んでいます、みなさんに分かりやすくお目にかけるのはこの状況では難しいですが、ここに弁があります。ここが箱で覆われていまして、その箱に風が流れ込むようにできています。箱が密閉されていますから、どこにも行きようがないんですが、この弁が開くことによって、弁からパイプのほうに風が導かれるようになっております。

その絵がいっとう最初の絵です。この絵で黒塗り箇所が、風が流れる道筋になっています。右側に丸い物体がありますが、これが電動送風機、モーターです。モーターで風を起こしたものがフイゴと言うところに一旦流れ込んで、フイゴから改めて風箱に。風箱の中に弁が入っています。その弁がさっきお見せした弁です。その風箱の上にパイプが表示されていますが、弁が開くことによってパイプのほうに風が流れ込み、それによってパイプは発音するわけですが、一方弁は鍵盤を押しま



カールン



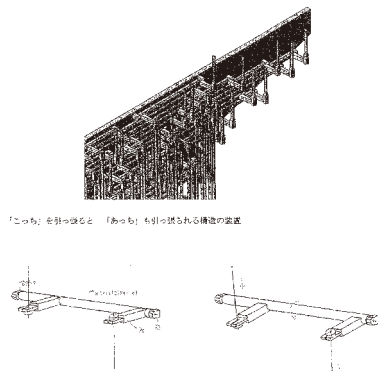
その図は、奥の図の図を参照してください。
カールン（カールン）は、カールン（カールン）の図を参照してください。
カールン（カールン）は、カールン（カールン）の図を参照してください。
カールン（カールン）は、カールン（カールン）の図を参照してください。

すと、トラッカーが弁と繋がっていて開くような仕組みになっています。3 ページ目にはフイゴの仕掛けについて説明されています。通常は板で閉ざされていて、風が閉じ込められるようにしてあります。風が充満すると開くようになっています。なんでこんなフイゴが要るかと申しますと、モーターから直に風箱に風を送ってもパイプは鳴るのですが、非常に風が安定しないんですね。そのためにここに一旦ためておけば、大きな音を出しても、急に風の消費量が増えても、この中に備蓄されていることによって足りない分が、モーターから直接送っただけでは足りなくなるものが、これで充足されるようになっています。ただ、モーターから風が送られっぱなしなので弾いていない時、風が消費されていないので、このフイゴが限りなく膨張してしまうと風の圧力で破裂する危険性があります。そのためにカーテン弁と言うものがついています。これはフイゴが膨らむとカーテン弁が閉じるようになっている構造になっています。そうすることによってフイゴはある一定のレベルから上のほうには当たらないようにできています。こういう仕掛けによって風が絶えず一定の状態風箱に供給されるようになっています。

もう一つの要素は最後のページです。ここにはヴェレンブレットとドイツ語で書いてありますが、このヴェレンブレットというものは何のためにあるのかと言うと、パイプ

ヴェレンブレット (Wellenbrett)

と鍵盤とをトラッカーと言うもので結ぶためです。最初のページをご覧ください。トラッカーと言うものが表示されています。この絵だけですと2次元



以前の図案の表と（もしくはその逆側）にパイプを配置することが出来なかったが、この装置の発明により自由な位置に配置することが出来るようになった。

元的表示なので平面的に書いていますが、実はヴェレンブレットという仕掛けです。こちらが鍵盤、トラッカーで繋がっています。鍵盤を押しますとこれが回転するようになっています。こういう仕掛けを使いますと、弁の位置は鍵盤と同一平面状になくてよろしいと言うことになります。パイプはケースいっぱいの幅に広がっています。こういうものを使うことによって大きなパイプを比較的自由に配置することができる訳です。パイプについてもう少し補足説明をします。パイプはいろいろなところに保管されていますので、後でご覧いただきたいと思います。大きいものから小さいものまで、これは比較的小さいものですが、一番小さいものはこれです。パイプには歌口というものがあります。実際

に範奏するのは、音はこの歌口から発せられます。ですからパイプの長さは、本質的には歌口からパイプの先端までですけれど、この場合は歌口がここにあります。吹いてみますとね、こういう音がします。♪吹く♪だいたい4,000ヘルツくらいの音がします。それからですね、違うタイプのパイプは、♪吹く♪懐古的な音がします。それはどういうことかと言うと、こちらはパイプの上段が違います。こちらは頭が開いています。こちらは閉じています。開いているパイプが標準的なものなのですが、こちらを開管と言います。開いているから開管です。とすればこちらは閉管です。♪吹く♪音の高さは一緒ですが音色が違います。こういうような違いによってパイプオルガンにはいろいろな音色が用意されているわけですが、他にも全く違う音色のパイプがあります。♪吹く♪これはトランペット。これは全く発音原理が違います。通常のいままでのは笛、いわゆる笛です。こちらはちょっと仕掛けがありまして、外に開いています。これは今のパイプの低音部のほうです。ここに振動板がついています。これが振動して発音する訳ですが、その上に共鳴管がついている訳ですね。これにも共鳴管がつくわけですが、大きすぎるのでこれは分解してあります。この部分が共鳴管です。共鳴管がつくことによってこの音が増幅されて立派な音になるわけです。それ以外にもシュトックという機構があるのですが、風箱の上にはいろいろなパイプが載っています。そのオルガンの特徴が、いろいろな音色を切り替えて演奏すると同時に、又は複数の音色を組み合わせ、また違った音色を作り出したり、大きな音とか小さな音をそれぞれ使い分けて演奏するようになっていますが、その音色を選ぶための仕掛けと言うのがあります。それがこの棒と言うか、板ですね。板にはぼつぼつ穴が開いています。たくさんの穴が開いていて、それぞれの穴がそれぞれ元のパイプと繋がっているんですが、その穴をこれによっていっぺんに開けたり閉じたり、オルガン奏者のそばにあるストップ（レジスター）を引くことによって、その音色を選んでそれで演奏ができる訳です。ストップを引きますとスライダーが移動しまして、こちら側に行くときは穴をふさぐ、こちら側に引くと穴が開く、それが全部のパイプについて一斉に行われるような仕組みに、全部と言いますか同じ列のパイプと言いますか。そういう仕掛けで演奏ができるという仕組みになっています。あと、ここでまだ説明していないのがペダルと言うものがあります。ペダルと言うのが足鍵盤のことなんです。オルガンは足でも演奏できるようになっています。それは後で実際にオルガンのデモンストレーションがあるそうですから、よくご覧いただきたいと思います。

以上で大体オルガンの構造の説明は終わりましたが、何か質問はありますでしょうか。

Q. パイプオルガンとピアノの違いについて

A. パイプオルガンはピアノと違う大きな特徴としましたら、ピアノのようにそうっとたたくと小さな音が出ます。ガンッとたたくと大きな音が出ます。ところがパイプオルガンはどうたたいてもどう弾いてもパイプがプーと鳴るだけです。ですからパイプオルガンの場合、大きな音を出す場合は単純に言えば、たくさんのパイプを持っていること、たくさんのパイプというのはたくさんのパイプは必要なのですが、色んな音色のパイプがたくさん並んでいます。そうしますと、いろいろな音色のパイプが一つのキーを押すだけで同時に鳴ります。その音色の数が3つしかなかったら、3つ分の音しか出ません。ところが大きなオルガンは50、または60、さらに100なんて言うの也有ります。そうしますと、単純計算では50の種類が備えているパイプオルガンは、1つのキーを押すことによって50個のパイプがいっぺんに鳴ります。ということは、広い場所に置かれたオルガンは大きな音が要求される訳ですが、50の音が鳴るとかなりな音になります。

Q. 礼拝のときにもっと簡単なピアノでは済まないのか。オルガンのほうがいいという理由。

A. 専門家でないので十分な説明ができないのですが、ピアノと言う楽器はオルガンよりも後で発明された楽器と言うことが一つあるかもしれません。というのは、オルガンが礼拝に使われるようになったのは15、6世紀頃だと思うんですけど、その頃はまだ発明されておらずでしたね。チェンバロと言う楽器はありましたが、あれは非常に音が小さいです。ですからたぶんそういう目的では使えないと思います。ピアノの音量は確かに大きくなるのですが、ヨーロッパの大聖堂の広い空間を音で満たすためにはピアノでは十分ではないのかと思います。それと宗教改革で、賛美歌を観衆が大きな声で歌う、その伴奏楽器としてはオルガンのほうがふさわしいのではないかと私は思います。その音量的、音色的に。それともう一つは、ピアノと言う楽器はキーを押すと音が出るんですけど、最初は大きな音がしますが、だんだんだんだん小さくなります。オルガンはキーを押している間中、音はずうっと持続します。人間の声と非常に調和するのではないかと。十分な説明ではないですけど。

Q. このオルガンは幾ら位するのか。修理代、この大修理代は幾ら位するのか。

A. 今回の修理は、数百万です。だいたいですね、1ヵ月半、5人のスタッフでやっています。でもそれは規模によって違います。修理のオーバーホールと言ってもいろいろどこまで突っ込んでやるか、それ

によっても作業は変わってきます。作業はだいたい人件費が殆どですね。

Q. ピアノは演奏の前によく調律があるが、パイプオルガンにもあるか。

A. パイプオルガンも調律します。ピアノの場合はかなりしょっちゅう、特に演奏会に使う前は必ず調律しますね。ピアノは弦を引っ張っている構造になっていますので、どうしても弦と言うのは緩む方向にあります。それと温度によって音質が変わってしまう、それを調節するため、調律するわけですが、実はパイプオルガンも温度によって調律が狂うんですけれども、ただ狂い方がピアノとちょっと違います。パイプオルガンの場合、どうやって調律するかというと、かなり分かりにくいんですけど、パイプオルガンはこの管の長さによってこの発音の周波数が決まるんです。ですから狂わなそうな気がするんですけど、ただ鳴る音の高さというのは温度によって変わります。温度が高くなると音高も高くなるんですけど、それが正確かということが高くなると音波の速さが速くなったりする、それ以上詳しく説明するのは、今は時間が足りない、本当を言うと私が良く分かってないということもあるんですけど。温度が高くなると管の長さが少し膨張する、少し長くなる、だから音が低くなるんじゃないかなという風に考える方もいらっしゃると思うんですけど、それは確かにないとはいえないんですけど、それ以上に温度によって音の速さが速くなる、その効果のほうが勝っているためにそういう現象が起きるということです。

調律の方法ですね、これは個別で対応させていただかないと時間が無いです。

Q. 見立てが同じパイプでどうして音色が違うのかのご説明でとてもよく分かった。このオルガンに限って言うと、(組み合わせ無しで)何種類の音色が出るのか。

A. 個々のパイプの数によって音色の数がある、組み合わせも入れますと、数学的な組み合わせによるとかなりの数になるが、実は役に立たない組み合わせもある。だから数学的な組み合わせよりもかなり少なくなると思います。

Q. 国柄等によるオルガン製作の違いは。

A. 奥の深い質問ですが、例えばカレーライスにしてもいろいろなバリエーションがあり、レストランや家庭によって違うと思います。でもどれもカレーライスです。作る人の好みとか持ち味とか、文化的な要素が影響するとはしか言えない。

関東学院大学パイプオルガン設置 25 周年記念特別講座より 主題「キリスト教と音楽 中心的な二つの流れとパイプオルガン」

桜美林大学芸術文化学群 教授 植 木 紀 夫

今日はパイプオルガンのオーバーホールということですので、パイプオルガンの話をします。キリスト教会のチャペルにパイプオルガンが当たり前のようにありますが、キリスト教とパイプオルガンの間にはどのような接点があったのか、実は、歴史上わからないところが多いのです。

パイプオルガンが何のために使われるようになったのかを追い、キリスト教とパイプオルガンについて考え、現代にどのような意味があるのかを考えてみたいと思います。話の途中で代表的な曲を一例としてお聞かせしたいと思います。

1. 序 聖書に見る源泉

聖書は賛美歌で満ちています。聖書の真中に「詩編」があり、それ以外は色々な歴史書や預言書や書簡です。「詩編」は、その時代の人が書いた神への賛美歌等が収められています。神を賛美する、神に歌う歌で満ちています。

時系列に追って聖書を調べてみますと、最初に出てくる神に向って歌った歌とは、何だと思いますか。「出エジプト記」に記載されています。聖書をあまりご存じでない方もこのストーリーは聞かれたことがあるかも知れません。

かつて、イスラエル人たちはエジプトに囚われの身となっていました。その中からエジプトで育ったイスラエル人のモーセがリーダーとなり、民を故郷に連れ戻します。有名な映画「十戒」の一場面です。最近「エクソダス」として映画はリニューアルされました。故郷に帰る民がどこを通ったのかには色々な説があるようですが、エジプトからイスラエルまで何万という民を連れて帰った物語です。所々で危険な目にも合いました。エジプト軍が後から追って、目の前には海があり、万事休すという場面があります。60 年前の映画「十戒」では、俳優チャールトン・ヘストンがモーセを演じ、海に向って手を上げると海が割れるのです。

旧約聖書の中で最初に出てくる「民は神に歌った。」という記述は、この場面で、海を渡り終えたイスラエルの民が、自分たちが見えない大きな力に守られたというところを経験したところで出てきます。聖書に「主はこうして、その日、イスラエルをエジプト人の手から救われた。・・・エジプト人が海辺で死んでいるのを見た。・・・イスラエルは、主がエジプト人に行われた

大いなる御業を見た。民は主を畏れ、主とその僕モーセを信じた。」

この映画の中には登場しませんが、聖書の記事に従うと、この時点で何らかの賛美歌を歌ったはずで、この場で「モーセとイスラエルの民は主を賛美して、この歌を歌った。」聖書の中で初めて出てくる場面です。「主に向ってわたしは歌おう。主は大いなる威光を現し、馬と乗り手を海に投げ込まれた。」「主はわたしの力、わたしの歌、主はわたしの救いとなってくださった。この方こそわたしの神。わたしは彼をあがめる。主こそいくさびと、その名は主……」(出エジプト 15 章 1 節以下)

この時代の歌が実際にどのようなものであったかを知るのには不可能に近いでしょう。わたしたちの知る楽譜の前身は、9 世紀頃の修道院のものです。数千年前の音楽がどのようなものであったのかはわかりません。しかし彼らが自分たちの言葉を朗誦する形で歌ったことは想像できます。しかしここに、何か音楽の源泉を見出すことはできないでしょうか。なぜ歌ったのか、その動機を認めることができます。神の存在を知り、神の業を経験し、神に応答（レスポンス）する。聖書はその「応答」に満ちているのです。人間から発したのではなく、神の恵みに人間が包まれて、そのことに感謝して応答する。キリスト教の音楽の本質とは「神への応答」です。神とコミュニケーションする。そのことが一つ指摘できます。

2. 中心的な二つの流れ

2.1. カトリック教会におけるラテン語教会音楽

「中心的な二つの流れ」と書きましたが、その話をしたいと思います。関東学院はプロテスタント教会で教派はバプテストです。プロテスタント教会で母国語による賛美歌を歌うのは、当然のことのように思われるかも知れません。おそらく関東学院の礼拝でも学生さんたちと一緒に賛美歌を日本語で歌っていると思います。実は中世ヨーロッパでは、政治と宗教は非常に近い関係にあり、お互いに利用するような関係でした。ローマ帝国がヨーロッパを支配していた時代は政教一致でした。様々なことが政治、社会、経済、宗教と繋がっていました。最終的にヨーロッパ全土で、ラテン語でミサが行われるようになりました。本日はパイプオルガンの話をするイベントですが、カトリック教会

では4世紀、典礼における楽器の使用を禁止したので
す。ヨーロッパのキリスト教国はもともと他民族です。
様々な習俗が交錯する中、礼拝の中に踊りなどの習慣
が持ち込まれないよう、距離をおいたのだと思われま
す。その後、千年近く教会音楽は修道院で培われ、神
に向けられる歌は人間の歌、人間の声が基本となりま
す。修道院で育った歌の代表例がグレゴリオ聖歌です。
♪グレゴリオ聖歌「キリエ」♪鑑賞

修道院に用いられたネウマ譜は、現在の楽譜と違い
ます。現在は五線ですが、ネウマ譜は四線です。音の
上下はわかるのですが、長短は完全には規定されてい
ません。基本的には一番・二番・三番とある歌で、聖
書の「詩編」を朗唱する習慣から作られたものが「グ
レゴリオ聖歌」です。カトリック教会音楽のとても大
切な根っこです。これが後にプロテスタントの賛美歌
に転用されていきます。

もう一つカトリックの流れではミサ曲があります。
「ミサ」はプロテスタントにおける礼拝と同様に思わ
れがちですが、その意味は「聖餐式」です。パンとぶ
どう酒をもってキリストの十字架の出来事を記念する、
それが「ミサ」です。厳密にはプロテスタント教会の
「聖餐式」と少し異なり、カトリック教会では「聖体拝
領」と言います。パンとぶどう酒が本当にキリストに
実体変化する、と理解されています。「ミサ」は聖職
者（司祭、神父）が執り行うもので、それに一般会衆
があずかる形がカトリック教会の「ミサ」と考えられ
ます。「ミサ」は当時の広大なローマ帝国内でラテン語
にて行われました。イタリア人、スペイン人にとって、
ラテン語はイタリア語、スペイン語の文語のようなも
のです。「ミサ」のためのミサ曲というのが一つのジ
ャンルのように育ち、教会音楽の一つのジャンルがで
きました。「アヴェマリア」など、カトリック教会のミサ
曲以外の題材を指したものを「モテット」と言います。
モーツァルトの「レクイエム」（死者のためのミサ曲）
KV.626。♪♪鑑賞

2.2. プロテスタント教会における母国語会衆賛美歌 （コラール）と教会音楽

カトリック教会の伝統においては、修道院で歌われ
た多くのラテン語聖歌が残されていますが、一般民衆
はそれらの演奏者ではありませんでした。聖歌を歌っ
たのは訓練された聖歌隊、毎日何時間も祈り、歌う修
道士たちでした。

それに対し、プロテスタント教会の成立は16世紀の
宗教改革によります。それは宗教的のみならず、社会
的、政治的、経済的にもヨーロッパ全土を変えてしま
う大きな出来事でした。

先にラテン語はイタリア人やスペイン人にとって文
語だ、と言いましたが、アルプスを越えたゲルマン系
の人たちにとっては、教育を受けた人以外はラテン語



植木紀夫教授

が理解できた訳ではありませんでした。

宗教改革を礼拝面、音楽面から見ると、礼拝の会衆
が自分たちの言葉（この場合ドイツ語）で賛美歌を歌
うことによって、礼拝をそこに参列する全ての人が能
動的に参加し得るものにしたということです。宗教改
革者マルチン・ルターはそうに礼拝を改革しました。
自分たちの言葉で賛美歌を歌い始めたことがプロテ
スタント教会とカトリック教会との大きな違いです。
その後、プロテスタント教会の教会音楽とカトリック
教会の教会音楽とは、互いに影響し合いながら発展し
ました。

おそらく、皆さんが一番良くご存じのドイツの賛美
歌曲は「イエスこそわが喜び」ではないかと思います。
民衆が自分たちのドイツ語で歌った賛美歌です。それ
をバッハが編曲をしました。

♪「イエスこそわが喜び」♪鑑賞

元々この賛美歌は4拍子でした。それを3拍子にし
たのがバッハです。この曲はバッハにより、知られる
ようになりました。バッハの時代の人たちもこれを合
唱で聞きましたが、自分たちが歌っている賛美歌だと
気がついたのです。自分達の言葉で賛美歌を歌うこ
とで、礼拝の会衆は本当の意味での礼拝者としての地
位を取り戻したのです。それが教会音楽における宗教
改革の最大の貢献であったと思われます。

ドイツに続きスイス、そしてイギリスで宗教改革が
行われましたが、日本におけるプロテスタント宣教の
経緯もあり、日本の賛美歌では英語の賛美歌が一番多
いのです。

2つの中心的な流れを紹介しましたが、賛美歌曲、カ
ンタータ、オラトリオなど、お話ししたいことは沢山
あります。いずれにせよ、これら中心的な2つの流れ、
すなわちラテン語聖歌と母国語会衆賛美歌は、互いに
影響し合いながら、今日の教会音楽へと繋がっていく
のです。



関東学院六浦中学校・高等学校礼拝堂

3. キリスト教会とパイプオルガン

中心的な二つの流れから「歌」についてお話しましたが、そこにパイプオルガンはどう関わってくるのでしょうか。本日はオルガン・コンサートもありますし、先ほどはオルガンの構造の話もありました。

そもそもオルガンが、何故、キリスト教会で使われるようになったのでしょうか、キリスト教にとってパイプオルガンはどのような意義があるのでしょうか。

3.1. パイプオルガンの用途の変遷

キリスト教会におけるパイプオルガンの意義を考えるにあたり、一度、時系列に歴史を紐解いてみたいと思います。まず、パイプオルガンは、何を持ってパイプオルガンと言うのかということから始める必要があります。パイプがあり、送風装置があり、それを制御する鍵盤がある。これらがパイプオルガンの主要3要素です。これら3要素を備えたパイプオルガンの原型は紀元前3世紀にあり、水オルガンと言われるものでした。水槽の中に水を入れ、その上にパイプを載せたものです。紀元前3世紀ですので、キリスト教の前身、ユダヤ教の時代です。場所はエジプトの都市アレキサンドリアです。水オルガンを作った人は今で言う「何でも屋さん」、あるいは「床屋さん」とも言われています。恐らく楽器を作ろうとしたのではなくて、空気圧の実験をして、それを実証するため上にパイプを載せ、それを“吹かせた”のではないかと考えられます。

パイプオルガンは、キリスト教会が発明したと考えられがちですが、水オルガンを見てわかるように、その始まりはキリスト教的な動機からではなかったようです。

3.2. ビザンティンの宮廷儀式で皇帝の入場行進に伴いパイプオルガンが演奏される（7世紀）

では、パイプオルガンは当初、どのような目的や用途で使用されていたのでしょうか。断片的にですが記録を追っていくと、その最初は、7世紀にビザンティ

ンの宮廷儀式において皇帝の入場行進に伴い演奏したというものです。実はそのパイプオルガンは木製の台車に乗せられ、皇帝の入退場に同行し演奏された移動式パイプオルガンでした。皇帝が街中の教会を訪ねることもあったでしょう。皇帝が宮廷礼拝堂やカテドラルに入退場する時に演奏されたと思われます。

3.3. ビザンティンのコンスタンティノス5世が、フランク王国ピピン王（3世小ピピン）にパイプオルガンを献上（8世紀）

8世紀、ビザンティンのコンスタンティノス5世がフランク王国ピピン王にパイプオルガンをプレゼントしました。フランク王国にオルガンがプレゼントされた、というのはこの楽器が中央及び西部ヨーロッパにもたらされたことを意味します。もし、この皇帝がフランク王にパイプオルガンをプレゼントしなかったならば、中央ヨーロッパのドイツで、後にバッハが活躍することもなかったかもしれません。このことはヨーロッパでパイプオルガンが実際に使われ発展するきっかけとなったのです。当時、フランク王国においても王の入退場にパイプオルガンが使われた記録があります。

3.4. フランク王国、ルードヴィヒ敬虔王がパイプオルガンを建造させる（9世紀）

9世紀、ドイツの宮廷儀式で皇帝カール1世の入場行進に伴い、パイプオルガンが演奏されました。修道院においてパイプオルガンが製作されヨーロッパにパイプオルガンが根付いた時期となります。

面白い記事があります。9世紀に修道院でパイプオルガンの製作が為されたのは教育目的であったようですが、当初の楽器は屋外で用いる移動式のパイプオルガンでしたから、音質についてあまり考えられたものではなかったようでした。おそらく、合図のための荒い音だったようです。

3.5. イギリス、フランス、ドイツの大聖堂に大パイプオルガンが設置される（10世紀）

10世紀にイギリスのマンチェスター大聖堂に大型のパイプオルガンが設置されます。「その粗雑な音響に人々は耳をふさいだ」という記録、また「パイプオルガンの音響がいかにかましく、教会にふさわしくないものか」という記録もあります。

なぜ、パイプオルガンが教会に設置されるようになったのか、明確な理由、きっかけは分かりませんが、教会への設置後、教会の礼拝に合うように、教会の空間に合うように、伴奏して人々が一緒によく歌えるように少しずつ改良されたのです。パイプオルガンの出元はキリスト教ではありませんが、大切なことは、パイプオルガンはキリスト教会が育てた楽器の代表例であるということです。

3.6. ケルン大聖堂における大司教叙階式でパイプオルガン演奏の記録

先に皇帝の入退場にパイプオルガンが使われたと述べました。おそらく、皇帝が街中に出て行く際に演奏される入退場曲になったと思われます。カトリック教会のミサの最初の部分を聴いてください。(ビデオ上映) 司祭団はパイプオルガンによる前奏と共に入堂を始め、祭壇到着でオルガン前奏は鳴り止みます。皇帝が宮廷や教会に入退場する際の一連の習慣や文化が教会に残り、ミサの始まりと終わりの部分に転用されたと考えるのが、妥当な解釈と思われます。礼拝の前奏とは、もともと司祭団の入堂(礼拝堂への入場)の動きに伴うものだったのです。

3.7. カトリック教会においてグレゴリオ聖歌の伴奏にパイプオルガンが使用される(17世紀)

17世紀になるとオルガンはカトリック教会では聖歌隊、プロテスタント教会では会衆の賛美歌伴奏に使われるようになりました。伴奏での使用には、聴いて美しく響くだけの音としてだけではなく、歌唱を良く支え、交えて豊かにする役割が求められます。教会はその時その時に応じて、パイプオルガンを教会の目的のために柔軟に変え、育ててきたのです。

パイプオルガンにはフルートやトランペットなどの色々な音色がありますが、他の楽器にはない音色が一つあります。プリンシパルというストップで、その元は人間の声を模倣したものです。伴奏として使用されることで、歌唱とパイプオルガンの接点が出来、パイプオルガンに求められる音色や用途も変化しました。

3.8. プロテスタント教会において会衆賛美歌伴奏にパイプオルガンが使われる(17世紀)

最後になりますが、プロテスタント教会において、当初、会衆に賛美歌を教え想起させる目的で賛美歌のオルガン編曲が多く作られました。またパイプオルガンが大型化したこともプロテスタント教会の流れに関係しています。20人の聖歌隊の伴奏ではなく、会堂を埋め尽くす人々の歌唱を伴奏し支えることから、オルガンの音質や音量が充実する必要性が生じました。結果オルガンは大型化し、低音部が豊かになりました。その発展の途上にバッハのような音楽家が登場し、教会音楽の大輪の花を咲かせたのです。

4. 結び「キリスト教と音楽」とその今日的意義

キリスト教と音楽の本質は、その存在と働きを人間に現して下さる神に、人間が応答すること、神と人間がコミュニケーションすることです。一般的な表現に替えさせて頂くとすれば、自分のためではなく自分以外の存在を認め、受け入れ、それに共鳴し「歌うこと」と言い得るでしょう。神への応答は、礼拝の本質であると言えます。

もう一つ、キリスト教とパイプオルガンの関わりです。パイプオルガンとキリスト教会の出会い是不思議なものでしたが、キリスト教会がこれほどまでにエネルギーを注ぎ、育てた楽器は他に例がありません。パイプオルガンは楽器の女王と言われます。繊細な音も出せますし、荘厳な音も出せます。また楽器1台で多様なことができます。私は、パイプオルガン自体が、神を賛美すると思います。しかし賛美の本質を考えるならば、神に応答するのは人間です。その意味でパイプオルガンは、神への人間の賛美の営みを助ける頼もしい助け手である、と言えらると思います。

最後になりますが、「キリスト教と音楽」の本質は、神に応答することであると述べました。重要な点は、それを共有する人の集まり、共同体、グループの存在です。それは教会であり、学校であり、また地域でもあるでしょう。わたしたちはパイプオルガンとキリスト教の音楽、またそれらの営みを通じて、様々な時代の様々な歌に出会い、それを共有し、私たちの新しい歌としていけると思います。

パイプオルガンのオーバーホールにあたり、「キリスト教と音楽」の今日的意義について考えてきました。本日、私たちがここに共に集っているということが、既に互いに繋がりを持っているということです。ここは学校ですので、学生・生徒は礼拝で賛美歌を歌い、説教に耳を傾け、そこで何かに出会い、自分自身と向き合い、また共有していきます。また今日この機会のように学校と地域がかかわり、横の繋がりにも発展していくことと思います。パイプオルガンは、共に集う人々の歌と共にその繋がりを支えてくれる存在であると思っています。

ご清聴ありがとうございました。

植木紀夫(学歴および学位)

1. 1984/04～1988/03 東京藝術大学 音楽学部 芸術学士
2. 1993/10～1997/07 Hochschule für Kirchenmusik der Evangelischen Landeskirche in Württemberg, Germany
3. 1997/07～2000/02 Hochschule für Kirchenmusik der Evangelische Landeskirche in Württemberg, Aufbaustudiengang, Germany, Diplom Kirchenmusiker A

(桜美林大学ホームページより抜粋)

「関東学院とわたし」

加納 政弘先生※に伺う

——本日はご自宅に伺い、加納先生から神学部と礼拝堂等についてお話を伺うことができますことを嬉しく思います。

関東学院で働かれるようになった経緯をお話しいただけないでしょうか。

加納 1946（昭和 21）年頃、日本基督教団雪ノ下教会の伝道所だった追浜伝道所（横須賀市）で夜に行われていた礼拝に出席していました。伝道師は半谷千代乃（はんがいちよの）先生でした。当時下宿をして世話になっていた重田悦子おばさんから、関東学院で英語のバイブルクラスがあることを知り、英語が好きだったので早速出席しました。

——バイブルクラスはどなたが主宰されていたのですか。

加納 アメリカ・バプテストから派遣されていた宣教師のスターリング・ピース先生（1957 年 4 月引退帰国）でした。主日（日曜日）の 9:00～10:00 まで開かれていました。その直後に行われていた関東学院教会礼拝にも出席するようになりました。

——大学神学部の教員をされていた時期の礼拝の様子などもお聴かせください。

加納 平日は 10:10～40 まで礼拝堂（兼講堂）で礼拝がありました。日曜日には白源三郎先生、中居京先生、下平千太郎先生などが出席されていました。その後、中居先生が学内で多忙になり、石井晴美先生に説教をお願いすることが多くなりました。また埋め立ててできた柳町は当時、海（平潟湾）でしたから、そこでバプテスマが行われていました。

1951（昭和 26）年、関東学院大学基督教研究所が発足したときに私は入所しました。当時、関東学院商工高等学校（夜学）の中居京校長からの依頼を受けて夜間数学を生徒に教えていました。

当時、同研究所には旧約聖書の専門教授がいなかったもので、わたしは聖書学の博士号を取得すべく米国へ留学することとなりました。

1955（昭和 30）年～1957（昭和 32）年までの 2 年間、アンドバーニュートン神学校に留学し、更に 1957 年～1959 年の 2 年間は、シカゴ大学神学校で学びました。その後 1959（昭和 34）年、留学生対象のピッツバーグ大会に参加し、そこでヒーデン・クウィスト博士の "Mission to the Jews" と題する講演を受けました。その際に配付された文献一覧表 Bibliography にある文献（『苦難の僕』等）を神学校で既に読んでいたので、講演後にヒーデン・クウィスト先生に話しかけました。そのとき先生は、渡航費は出ないが、イスラエ

ルのエルサレムに来ることができれば、1 年間奨学金が支給される旨、紹介してくださいました。中居京先生



に 1 年間留学を 日本バプテスト同盟 霞ヶ丘教会礼拝堂 延期する許可を手紙で得ました。そこでシカゴ大学食堂で 2 年間ウェ이터（昼食給士）のアルバイトで働いて得た 1,000 ドルを渡航費に当てました。

1959（昭和 34）年～1960（昭和 35）年、(1 年間) エルサレムにあったスウェーデン神学研究所でハンス・コスマ博士の下でユダヤ教の過越祭伝承の研究を学びました。

——アメリカ、イスラエルの各大学に留学後に神学部の教員になられたのですか。

加納 はい、そうです。1960（昭和 35）年秋に帰国したときは、関東学院大学基督教研究所は秋から既に神学部に改組されていました。1960（昭和 35）年からそこで講師として教えることになりました。そのとき神学部礼拝堂にはパイプオルガンも設置されていました。その礼拝堂では結婚式、学院役員・役職者の葬儀が挙行されていました。大学礼拝は、礼拝堂兼講堂において継続して守られていました。神学部独自の礼拝は週に 2～3 回、月曜日、水曜日、金曜日に行われていました。坂田祐先生が大学礼拝でよく説教しにいらしたことを覚えています。当時、下田哲兄（後年、関東学院女子短期大学学長）がリーダー的存在でした。学寮は北寮と中寮と南寮の三つありました。神学部の学生はそれぞれ別々の寮に入っていました。

——神学部礼拝堂にはパイプオルガンが設置されましたか。

加納 はい、わたしが留学する以前から既にパイプオルガンは神学部礼拝堂にありました。しかし、大学紛争が激しくなったために旧パイプオルガンは、霞ヶ丘教会（三春台）に一時預かってもらうことになり、現在に至っています。

1989（平成元）年に大学には新しい礼拝堂が建造され、新たにパイプオルガンも設置されました。（当時茨城県つくば市のバッハの森で使用されていた草苅パイプオルガンが移設された）

——1973（昭和 48）年 3 月に神学部が廃部され、加納先生もたいへん苦労されたのではないのでしょうか。

※加納 政弘（関東学院教会名誉牧師・元関東学院大学神学部助教授）

加納 はい、たいへん辛い目に遭いました。1967（昭和42）年4月から既に関東学院教会兼任牧師として教会の働きを行っていましたが、1974（昭和49）年4月に関東学院教会の専任の主任牧師として招聘されて、以降2001年4月までの27年間主任牧師を務め、現在は同教会の名誉牧師をしています。

——この間、関東学院との関係において記憶に鮮明に残っていることをお聞かせください。

加納 学生紛争と神学部廃部1973（昭和48）年により青年がキリスト教に関心を持たなくなり、教会にも青年が集まらなくなっていました。そんなときに女子短期大学の英語教師にリーニ・スウィージー師が来日し、室の本校地内の宣教師住宅でバイブルクラスを開き始め、宣教師館建造後1977（昭和52）年には、週に2回（火・金曜日、後には金曜日の夜だけ）開かれ、多くの青年が学びました。わたしはその通訳を務めましたが、先生の聖霊信仰には驚かされました。多いときには約50名の出席者がありましたが、その中から献身者が現れ、神学校に進学した者が4名も出まし

た。そのうちの3名が現在、宗教法人日本バプテスト同盟の牧師をしており、もう1名は、日本のキリスト教学校のチャプレンを勤めた後、現在は米国で弁護士・弁理士として活躍しています。スウィージー師は1981年3月に引退帰国されましたが、日本滞在中の8年間にクリスチャンになった人



神学部から霞ヶ丘教会に移設されたパイプオルガン

うちの多くが青年でした。神学部廃部の苦難の時に神様がスウィージー師を関東学院に遣わしてくださったと私は信じています。

——今日は、貴重な時間を割いてインタビューをお受けいただき誠にありがとうございました。

（2016年1月7日に加納政弘先生宅に伺い、鳴坂明人および瀬沼達也がインタビューした。）

「十字架の下に立つ霞ヶ丘教会」

ーパイプオルガン設置の由来ー

元霞ヶ丘教会牧師・元関東学院大学法学部教授 佐々木 敏 郎

今朝から私ども霞ヶ丘教会の礼拝は、この新しい会堂で始めることになりました。今日はまことに意義深い日であります。私ども、ここに招かれました者は心をこめ、全身全霊をもって礼拝を捧げたいと思います。

さて、今年度の年間主題は「新しい教会づくり」であります。この坂田記念館の中に長い間の念願であった新しい会堂が与えられました。私どもは初心にかえて「新しい教会づくり」に励まなければなりません。教会の受入れ態勢は十分整っておりません。この新しい出発に当たって、まず、教会がどのような教会であるべきかを考え、第一歩を踏み出したいと思います。

そこで、私の心に浮んで来た言葉は、「十字架の下に立つ教会、土台は主イエス・キリスト」であります。この新しい教会には、高いステンレスの十字架が立っており、京浜急行の電車からもよく見えます。夜、スポットライトが点くと十字架が夜空に浮んで見えます。また、会堂内正面には、柔らかな光の下に大きな十字架がよく映えます。やがて、この会堂に元関東学院大学神学部のパイプオルガンが移設されることになっております。この講壇も祭壇も椅子も皆、元関東学院大学神学部の礼拝堂にあったものです。椅子20脚も新しく塗装され大変きれいになりました。大学に新しい礼

拝堂が出来、これらのものが廃棄されることを聞いて、大変にもったいないと思いました。それ以上に、私は何としても、神学部の大事な遺産を復元したいと切望しました。このパイプオルガンはB.L. ヒンチマン先生（アメリカ、バプテスト宣教師総主事、元関東学院学院長）の教会に所属される葬儀社の社長が3千ドルを献金され、寄贈されたと伺いました。

（1990年7月1日、主日礼拝説教から）

教会のパイプオルガン奏献式は、横浜チャペル・センター・オルガニストの松平郁子先生によって1991年3月17日に行われ、出席者に大きな感銘を与えました。この美しいオルガンの調べは多くの人に励ましと深い慰めを与えてくれる事でしょう。

関東学院大学チャペル設置年 1958年3月

霞ヶ丘教会（日本バプテスト同盟）設置年 1991年3月（移設 マナ・オルケルバウ）

製作・設計・整音 ヴァルカー社（ドイツ）設置年 1958年、9stops, 655pipes, 2MP

（日本のオルガン第一集 p.111 参照）

大学礼拝堂にパイプオルガンを寄贈する

関東学院大学 燦葉会会長 鈴木 正

大学の新しい礼拝堂にパイプオルガンを、燦葉会が寄贈する計画は、1988年秋から1989年10月献堂式の目標達成、1991年3月に購入資金募集を終えています。この間の先輩達の活動を「会報」の記事、幹事会議事録の経過から、報告させていただきます。

パイプオルガンを寄贈、購入資金は総て募金で！

パイプオルガン（草薙オルガン工房・代表者：草薙徹夫氏）が、茨城県にある筑波バツハの森文化財団（理事長：石田一子氏）から売出しの情報、幹事が下見、その報告書を幹事に郵送。

次いで、1988年8月30日幹事会に会長から、「六浦校地に新築されるチャペルに、現在筑波のバツハの森にある草薙徹夫作のパイプオルガンを寄贈する、また購入資金は総て募金で賄う。」が提案され、要望を受けての声も出たが、「寄贈申し入れ書」提出の説明があり、大多数で承認されている。また全会員からの募金活動により行う。具体的募金活動の立案を小委員会を設け行っていくことも決めている。

1988年10月5日幹事会では、＜大学礼拝堂パイプオルガン購入資金募集趣意書＞案により募金を行うことが承認されている。

次に1988年10月発行『さんようつうしん 21号』発送に決定した趣意書を同封し、燦葉会会員へ募金を早くも呼び掛けを行っている。

1989年3月20日発行『さんようつうしん 22号』に、「大学礼拝堂パイプオルガン寄贈について」（募金実行委員長小泉裕一）を掲載、広く卒業生に募金活動参加を呼び掛けている。あわせて、平成元年2月15日までの募金協力者を掲載している。募金合計3,754,000円（一口2,000円）。同時にこの号で募集を呼び掛ける趣意書（2回目）と振込用紙（銀行・郵便両用）を共に同封。またこの記事の写真には、オルガンの製作者と当時の燦葉会において寄贈活動に直接携わった4名の姿が…、その方々の言葉を綴り、大事業に先輩達が、どう対応したか見ることにしたい。

2015年8月18日開催の＜パイプオルガン設置25周年記念特別講座＞の場に、三根・小泉両先輩の姿はなくても、両先輩を軸に大きな歩みがあったからこそ、大学礼拝堂にパイプオルガン寄贈事業を通じ、六浦キャンパスに学んだ者が一体感共有という燦葉会会員としての認識の実現に至ったと考えている。そこに連なった人々、その意気込みが伝わると思います。



礼拝堂建設予定地に立つ燦葉会一小後摩・小泉・穂山の各幹事・三根会長と草薙氏（右から2人目）

1989年11月20日発行『経済学部会報けいざい第10号』に、小泉裕一委員長は、「パイプオルガンと関東学院大学」と題し、次のように記している。

〈要旨〉いま、金沢八景キャンパス正門を入ると見える7号館、以前その場所には大学礼拝堂があり、毎週月曜日から金曜日（現・穂山孝監査から土曜日は学生礼拝、YMCAが担当と指摘）の1時限終了後、20分程度の礼拝が行われていました。その礼拝堂には、勿論オルガンがありました。

また、その頃キリスト教史Ⅰ・Ⅱ、キリスト教学Ⅰ・Ⅱの計4科目8単位を必修で学んだ者は、そのチャペルがキリストの体であり、そこで奏でられるオルガンの響きが賛美する私達の祈りの表現であると教えられ、今も忘れられない。何故なら「人になれ 奉仕せよ」の聖句から校訓が、未だ私達OBの心に刻み込まれていることでもおわかり戴けよう。そして必修科目でない今にも、この校訓とチャペルの容姿は片隅にでも生き続けていると思います。

燦葉会創設60周年記念事業として

1949年4月、関東学院大学（経済学部・工学部）発足、1971年6月20日に会は会則を改正、部会中心の活動に移行。ときに会員数は2万名を超えていた。

1989年6月14日の幹事会で、燦葉会は1990年に前身の関東学院燦葉会が1930年設立から創設60周年記念大会の開催が提案された。記念事業の一環に＜燦葉会創設60周年記念事業・大学礼拝堂パイプオルガン購入資金募集趣意書＞を作成、「寄付金募集事業推進人名簿」を付し会員へ寄付を呼び掛けている。

〈要旨〉 礼拝堂につきましては、既存のものが老朽化している上に、母校の建学の精神を表すシンボルとしても、キリスト教教育のためにも決して十分といえるものではありませんでしたが、幸い新礼拝堂が1989年10月竣工を目途に建設されることになりました。場所は大学図書館の北側で、規模は収容人員150～200名とのことです。

創立105周年を迎える時期に礼拝堂が建設されることは母校に関係する者にとってなによりの喜びであります。これを機会に燦葉会としても大学からの要望もあり、とくに優れたキリスト文化芸術の表現と展開に寄与するために、大学にふさわしいパイプオルガンを寄贈したいと願っておりますがいかがでしょうか、我々燦葉会員の一人一人が母校発展の礎となる気持ちを一つの形で表してみようではありませんか。

1989年10月に、母校が創立100周年を迎え、燦葉会は47,000余名のOB会に成長し、創設60周年の記念行事を企画、1991年3月までの期限で、寄付を再度呼び掛けを行いました。

1989年11月8日幹事会で、10月16日＜新大学礼拝堂献堂式＞挙行 理事長挨拶で、燦葉会のパイプオルガン寄付について感謝の辞との報告がされている。

1990年3月発行『さんようつうしん25号』に、三根会長、次の一文がある。

〈要旨〉 OB各位の熱誠あふれる募金によって、購入されたパイプオルガンが、いち早く、この3月の末に新礼拝堂に（六浦キャンパス内）の正面右側に据付を完了いたし、その献納式が挙行されました。荘重なる音が場内一杯に響き渡ったとき、それに立ち会った関係者一同、その豊かな音量に圧倒され、しばし、感動の坩堝と化した次第であります。

それ故呼応するかのようには6月には募金額が目標の3分の2に達し、これを支えてくださっている多くのOBの熱誠を思うとき、ただ、深く頭を下げるのみあります。残り3分の1の金額八百余万元は、まだ応募期間九か月が残されておりますので、後輩の豊かな情操教育を願うOBの熱意が続く限り、達成されるものと確信いたします。

同年10月28日に燦葉会創建60周年記念式典、パイプオルガン演奏会、ホームカミング・デイ、恩師の遺品展示会など一連の記念行事が行われました。

1991年9月25日発行『さんようつうしん27号』に次の＜パイプオルガン購入の資金募集完結お礼＞－燦葉会創設60周年記念行事－「大学礼拝堂で大活躍のパイプオルガン」と題し、お礼と報告の言葉を掲載。

〈要旨〉 キャンパスに朗々と響き渡るベル（カリヨン）の響きに引き続いて、厳かな音色で観衆を感動させる

パイプオルガン。
このオルガンこそ4万8千燦葉会員の総力の結晶です。大学に礼拝堂建立をきっかけに神の啓示のように湧き上がった“礼拝堂にパイプオルガンを”の波は総力を挙げての募金活動へと広がりました。そして今、目標をクリアして晴れて法人関東学院へと引き渡しを行うこ



大学礼拝堂壁面に「パイプオルガン寄付者芳名版」

とができました。ご協力に対して、役員・同会員皆様はじめ学院関係者及び企業の方々に厚く御礼申し上げますと共に、これからもパイプオルガンが私達の祈りとして鳴響きますようお願い次第です。また1930年創設以来60年を迎える燦葉会にとって、一区切りの節目の記念行事として立派になしえたことを会員一同心からお祝いしたいと思います。担当幹事小泉裕一を掲載。

2015年10月31日開催の「2015年度全国代表者会議」出席代表者は、当日、行われるリニューアル後のパイプオルガン演奏、その荘重なる音色を耳にすることになる。

＜関係文書＞

1. パイプオルガン購入資金寄付に関する覚書－1988年10月27日付、（その他付属文書）
2. 燦葉会長・三根守宛：「草薙オルガン工房：草薙徹夫」発通知文書

＜参考資料＞

- 資料1. 燦葉会発行・『さんようつうしん21号』～『さんようつうしん27号』
- 資料2. 大学礼拝堂パイプオルガン購入資金募金趣意書（1989年4月吉日）
- 資料3. 燦葉会創設60周年記念新大学礼拝堂用パイプオルガン購入資金寄付金募集推進人名簿
- 資料4. 経済学部会会報第10号（1989年）平成元年11月20日
- 資料5. 燦葉会・昭和63年度幹事会議事録（3回分）
- 資料6. 燦葉会・平成元年度幹事会議事録（10回分）
- 資料7. 燦葉会・平成2年度幹事会議事録（8回分）
- 資料8. 燦葉会・1991（平成3）年度幹事会議事録（7回分）

関東学院と賛美歌（その1）

～ A・A・ベンネット宣教師夫妻作詞・作曲の賛美歌を中心に～

関東学院 調査役・前学院史資料室事務室長 瀬 沼 達 也

しずけきタベの

- 1 しずけきタベの しらべによせて
歌わせたまえ、父なる神よ。
- 2 日かげも休ろう ころにしあれば、
父にぞゆだねん きょう播きしたねを。
- 3 日ごとわがなす 愛のわざをも、
ひとに知らさず、かくしたまえや。
- 4 鳥はねぐらに、ひとは家路に、
帰る夕べこそ いとしづかなれ。
- 5 神よ、この世の 旅路おわらば、
わがふるさとに 憩わせたまえ。

この詩は、関東学院の第一の源流である横浜バプテスト神学校初代校長のアルバート・アーノルド・ベンネット Albert Arnold Bennett (1849-1909) 作の賛美歌である。これに曲をつけたのは、夫人メラ・バローズ・ベンネット Mela Barrows Bennett (1858-1936) である。

高野進著『関東学院の源流を探る』所収「ベンネット」に著作活動の小見出しがあるが、その文章の中の賛美歌に関する部分を抜粋引用する。

著作活動

彼は多忙な生活の中で、時間を作り、多くの著作と論文を著している。彼の日本における主な文書活動は1886年に始まる。その年の1月1日にネイサン・ブラウンが天に召された時、未完成に終わった賛美歌集の完成と出版、新約聖書邦訳の最終版の発行がベンネットに委ねられた。N・ブラウンの『基督教賛美歌』はベンネットによってまもなく出版された。その序文でベンネットはブラウンへ心からの尊敬を表わしている。

「この賛美歌のために、ブラウン博士は麻痺した手がもはやペンを持てなくなるまで仕事を続けた。この賛美歌に彼の責任とされるべき欠陥があるかもしれない。もし彼が生きのびてこれを完成するとしたら、改訂あるいは恐らく変更をしたであろう。しかし彼が天に召される前にそれはすべて配置が決まっており、大部分印刷されていたので、すでに印刷されたものや、推進された計画が周知である限り、変えない方がよいと思われた。彼が喜んでやって来た仕事を完成するためにあと少し命が与えられたとしたら、との口惜しさが幾度となく湧いてくる。」



▲賛美歌48番と213番『賛美歌（1954年版）』より
（日本キリスト教団出版局楽譜版下使用許諾No.版016-046）

く湧いてくる。」

ベンネットはやがてこの賛美歌を改訂した。その事情を彼は誠実にもこう序文において記す。

「明治初期のバプテストの賛美歌集は少なくない。しかしそれらの中で三つが注目値する。その最初のものが1874年『聖書之抄書』であった。そこには27曲が含まれていた。これはローマ字つき片仮名を使用したものだった。第二番目のものが、1876年の賛美歌である。これは138曲が含まれていた。その中の76曲がローマ字で記され、他は平仮名で記されていた。その76曲はN・ブラウン独自の工夫によるドレミファ階名唱法に合わせている。第三番目のものは、N・ブラウンから委ねられて私が出版することになったものであった。これには337曲が含まれ、すぐれた特色もっていた。ところがそれは二つの点で不満足である。まず第一に楽譜がついていないこと……。第二にそれはかなり多くの曲をメソジスト派の賛美歌から借用し、しかもことわりなしに、バプテスト賛美歌と呼んでいたのは正当ではないことである。ブラウン博士は真に誠実で偽りの主張をとっても嫌う人でしたから、彼が生きのびてこれを改訂したとしたら、当然受けるべきところに名誉を帰しただろうということを保証したい。彼が未完のまま残したものを完成する任務を委ねられた私は、出版の後、だいたい経ってから、日本におけるメソジスト派の賛美歌作家の代表的人物—J・C・デヴィソン師の寛大さに大いに負っていることを、知ったのである。」

この序文からもベンネットがどんなに良心的であるかがわかるであろう。

1886年にベンネットは夫人の助力を得て、英語讃美歌を編集出版した。これは山手75番地の横浜第一浸礼教会で行なわれていた毎週日曜日の午後の英語礼拝用に作ったものである。この序文にもベンネットらしさが見られるので引用しておこう。

「この小冊子は特別の目的のために用意された。それは小さな教会のために適当な讃美歌集を提供することを旨としたものである。旋律は明確に文字で示唆した。また廉価で売れるようにした。これは大型の讃美歌集に対抗するつもりのものではない。それは小さな星座のようなものである。大空のすべてのもっとも明るい星を含んでいるものでも、第一級の星と呼ばれる輝きをもつ星のみからなるものでもない。この編纂の仕事は一宣教師とその妻の楽しみであった。この仕事はすでに過重であり、知的能力と時間にさらに負担となったことは、認めないわけにはいかない。しかしながら他方、通常の宣教活動の重荷をさらに増したというよりは、むしろ軽減するために役立った。……ご想像いただけるように、とても多くの泉の水が讃美歌という流れを作った。そしてこの流れが、平凡な労働の時に潤いを与えてきたのである。この小冊子を使う人々にも、山間の細流のような歌の小川を、あるいは踏み進む岩の道にただようそよ風を見出していただきたい。こうして宝石のような水しぶきが足もとにかかり、目に見えないささやきが彼らを慰めるであろう。」

ベンネット夫人は音楽の素養を持っており、夫妻の作詞・作曲による讃美歌48番が今でも歌われている。この小冊子の編集においても、彼女の協力があつたことが暗示されている。この小冊子には彼の作詞した讃美歌が12曲掲載されている。しかもここでベンネットは自分の名を記さず、彼のイニシャル「A・A・B」を密やかに「***」で表わしている。彼の人柄がよく示されている。

.....

なぜベンネットが日本人からこれほどに慕われ、敬愛され、讃美歌213番にまで歌われたのだろうか。人々が彼の中にこれまでの日本の指導者にならぬ自分たちと同質で、しかも新鮮な指導者像を見たからではないか。日本の歴史においては、日本の指導者たちは一般庶民に対峙し、異質な存在として自己の権力、権威、優越を誇示してきた。これこそ崇拜を得る道と考えられてきた。結局、神聖化、神格化が主張されてきた。ところがベンネットの場合、彼はしもべとして仕える生き方に徹した。C・K・ハリントンは彼を愛の使徒ヨハネに

たとえた。人々は彼の中にしもべとしてのキリスト・キリスト教的指導者像を見たのであった。彼の墓碑銘、“He lived to serve.” はこのような彼の生涯を一言で要約したものと言える。

以上が『関東学院の源流を探る』からの引用である。高野進氏はその著作『A・A・ベンネット研究 ある異質な指導者像』でも賛美歌に関して下記のとおり記述している。

ベンネットが自ら讃美歌を作った動機はなんだろうか。多くの人々に歌われ、また歌いつがれる讃美歌の作者は、まことに作者冥利であろう。その詩は、作者の内的なものの表現であり、キリスト教信仰の告白とも言える。子供の時には、その意味をあまり理解せずに歌ってきたが、年齢と共にその意味と味わいがわかってくることもある。(P.305)

実はこの讃美歌はベンネット夫人の作曲である。ご夫妻でこの美しい歌を作ったことになる。これは現行の讃美歌48番である。なおここでは旧版(1931年発行)のものを紹介しておく。(P.309)

同書の中ではベンネットの英語讃美歌について詳細に記述されているので、ぜひ読むことをお勧めする。

(当ニュース・レター裏表紙につづく)

賛美歌とは何か

「賛美歌とは歌うことによる神への賛美である。賛美歌は神への賛美を表現する歌である。賛美であっても、神への賛美でなければ賛美歌ではない。賛美で、しかも神への賛美であっても、歌われなければ賛美歌ではない。」(聖アウグスティヌス)

従って賛美歌であるためには、三つのことがら——賛美、神への賛美、さらに歌われることが必要なのである。

代々のキリスト教徒は、初代教会の昔から、礼拝をはじめほとんどあらゆる集会で賛美歌を歌ってきた。

どの宗教も必ずと言ってよいほど歌を伴っているものであるが、キリスト教の場合には、その起源であるユダヤ教の時代から、視覚に訴える偶像の制作と礼拝をきびしく禁止したかわりに、言葉を主体とする礼拝の一要素として賛美歌の発達が行なわれた。そして、おそらくはどの宗教でもそうであるように、キリスト教の賛美歌も精神的に芸術的に高められて発達してきた。今の西洋音楽は事実上、近世になって世俗音楽が教会音楽と分離するまでは教会音楽とともに成長してきたのである。

(原恵、横坂康彦共著『新版 賛美歌その歴史と背景』からの抜粋引用)

「チャペルコンサートにまつわる思い出」

関東学院大学 オルガニスト 鈴木 敦子

私は音楽大学でピアノを学んだ後、オルガンの勉強を始めました。教会では中学生のころから教会学校の礼拝奏楽に用いていただいていたのですが、教会音楽、それもオルガンというジャンルの学びがあることをそれまでよく知りませんでした。そして同時に関東学院大学礼拝での奏楽をさせていただけるようになり、私にとって初めての本物のパイプオルガンが旧チャペルにあったヴァルカーのオルガンでした。（現在 三春台の坂田記念館にあります）その後 子育てでしばらくお休みしていましたが 数年後、チャペルが新築され新しく草薙オルガンが入るという情報を得て、度々組立の様子を見学に行かせていただきました。普段はオルガンの箱の中に納められていて見えないふいごやパイプ、トラッカー、スライダーなどがチャペル内に広げられている光景を見ることも、オルガンビルダーさんから直接お話を伺えることも なかなか得られないチャンスで本当に興味深いものでした。オルガンを弾くにはまず相手（オルガン）を知ることが大事、人とかかわりにも似ています。その時からオルガンとの日々が始まり、幸せなことに週に1回はこのオルガンで練習する機会を与えられたのでした。

まもなく、「チャペルに学生が足を運んだ時にできるだけ毎日オルガンが響いてほしい」というチャプレンの松本先生のご提案で20分間のチャペルコンサートが週1回のペースで開始しました。演奏者は3人、六浦小学校の音楽教師をされていた関東学院教会の故田上先生と霞ヶ丘教会の佐々木先生、そして私、当時の教会には珍しくいずれもオルガンの勉強をしている人たちでした。初めは手書きのプログラムによる本当に小さなコンサートでした。それでも 勉強する者にとっては演奏の機会をいただけるということは得難い快い？緊張でしたし、20分のプログラムを組み立てることはかなりの苦労がありました。なにせ勉強していると言ってもごく普通の教会の奏楽者は教会で用いる奏楽曲以外の曲を演奏する機会ほとんどないのです



から。

その後徐々にオルガニストが与えられ、コンサートもバラエティーに富むようになりました。古い音楽から



新しい音楽まで可能性は広がり、また、声楽や管楽器、合唱とのコラボレーションも行われるようになり広報もしていただきましたので人数こそは多くありませんでしたが 興味を持たれた学生さん、職員だけでなくオルガンのうわさを聞いて外部から聴きにいらっしゃる方も現れるようになりました。草薙オルガンはとても繊細で（だから難しくもあるのですが）魅力的な楽器で、それは天井の高いチャペルの中で素晴らしく響きましたから演奏する者も聴いてくださる方も恵まれた時を持つことができました。

外部からのお客さまの中に 近隣のおなかの大きな若い女性がいらっしゃいました。その方は赤ちゃんが生まれた後もお散歩がてらお子さん連れでよくいらっしゃり、私たちともお顔馴染みになりました。ある時、私は「ロンドンデリーの歌」によるプレリユードを演奏しましたところ 終わってからその方に声をかけられました。「先日 父が亡くなったのですが この曲を父が好きだったのでとてもうれしかったです」とのことでした。「ロンドンデリーの歌」はアイルランド民謡です。世界中で様々な歌詞を付けられて歌われていますが、賛美歌としても歌われる曲です。日本では『讃美歌第2編』の157番に「この世のなみかぜさわざいざないしげきときも…みまえにつどいいのれば…悩み去り 憂きは消ゆ」懐かしい曲に慰めの言葉が重なっています。奏楽には言葉がありませんが 基の旋律が歌詞を持っている場合はより具体的にそのメッセージを届けることができます。私たちオルガンを弾く者たちはそんなふうに聴く人をまた自分自身をも神さまの恵みの中に誘う役目を与えられているのだと感じます。これからもオルガンはチャペルで響き続けて聴く人々を神さまの恵みへと誘うことでしょう。その歴史の始まりに参加できたことは心から感謝でいっぱいです。

25周年おめでとうございます。今後のご発展をお祈りいたします。

「きよきところをつくれ」

—関東学院大学礼拝堂の歴史と意味—

関東学院大学 名誉教授・元関東学院宗教主任 高 野 進

はじめに

一、きよきところを つくれよと
あまつみかみの のたまいし
むかしの日より 今もお
み民にそなえる めぐみかな

二、めぐみの父の 住みたもう
きよき宮居を きょうここに
また見ることの たのしさよ
いく千代かけて かわらざれ

三、かわらぬ愛の イエス君よ
みかみの宮に ましまし
いにしえおもい なつかしむ
われらといつも ともにませ

四、ともにまします みたまこそ
くらきをてらす ひかりなれ
とわにかかわらず てりたまえ
われらのうちに この宮に

これは日本キリスト教団出版局発行の『讃美歌』210番である。この曲はアメリカの有名な賛美歌詩人、ファニー・クロスビー（1820 - 1915）のものである。この曲は、492番でもう一度出てきている。その方は、もっとよく知られているものである。「かみのめぐみは／いとたかし／あおぐ高嶺の／しらゆきに／あさ日匂える／ヘルモンの／山にもまさり／たかきかな」という歌である。この女性は、生まれて6週間目に視力を失った。しかし彼女は学びを続け、後に盲学校の教師になった。彼女は30歳で自覚的なキリスト教徒になり、賛美歌を作り始めた。後に、ニューヨークの同じ盲学校の教師で、オルガン奏者、アレグザンダー・ヴァン・オルスタインと結婚した。彼が彼女の詩に旋律をつけたのである。

作詞者は、藤本伝吉である。この人は大阪の生まれで、早稲田専門学校（今日の早稲田大学）に学び、1894年に捜真女学校の国漢教師、後に教頭をつとめた。彼はA・A・ベンネットからバプテスマを受けて、横浜第一浸礼教会に属している。1920年からは設立されたばかりの中学関東学院の国漢教師になっている。この作詞は1894年である。その年に横浜バプテスト神学校（関東学院の前身）の新校舎が山手75番地に竣工し

（10月）、その場所から一段下に、横浜第一浸礼教会堂が新築献堂された（12月）。このような背景から考えると、この献堂の讃美歌は私たちの礼拝堂と深い関わりがあることになる。

第一節では、礼拝堂の建設が、私たちに神から課せられた命令であるとともに、恵みでもあるとして受けとめられている。第二節では、礼拝堂の完成を喜んでいる。第三節では、イエス・キリストがそこにおられるように、と祈っている。第四節では、聖霊が暗い世界、私たち、礼拝堂を照らすように、と祈っている。

またこの藤本伝吉は、賛美歌213番を作詞している。これはA・A・ベンネットをモデルとしたものである。これは福音のため、人々のために仕える宣教者を描いている。（注・川端純四郎著『さんびかものがたりⅤ 平和の道具と』の中の「しずけきタベの」の項目で、ベンネットについて詳しく紹介されている）

六浦キャンパスの四三年

1945年の戦災により三春台の校舎がほとんど使用不可能な状態になった。1946年に中学部と工業専門学校が六浦に移転した。ここは、旧海軍の航空技術工員養成所があったところである。ここの土地と建物の購入は、アメリカ・バプテスト教会の援助によった。その年に、経済専門学校の設置が認められ、開校した。このようにして、工学部と経済学部の母体が揃ったのである。文部省に提出された経済専門学校の設置申請書には、「教育ノ特質」として次のことが書かれている。「本校ノ教育上ノ特質ハ、一ニハ、基督教ノ信仰ヲ通シテ高キ道義ト確固タル信念ノ育成ヲ計リ、二ニハ演習ニ重点ヲ置キ、師弟ノ俱学俱進ヲ以テ学生ニ自発的ナル調査研究討議ヲ為サシメ、之ニヨリ諸般ノ社会現象ニツキ鋭ニ科学的判断ヲ函養セシメントスルニ在リ。尚、従来ノ基督教学校ノ特質タリシ外人教師ニヨル実用語学ノ習得ニ、カヲ注グト共ニ基督教文化ノ理解ト外人教師トノ接触ヲ通ジテ世界文化ノ認識、国際関係ノ洞察ヲ容易ナラシメントス」〔句読点を入れて読みやすいようにした〕。1948年に提出された「関東学院大学設置申請書」では、「目的及使命」を次のように示している。「本大学は、基督教に基づく人格の陶冶を旨とし、教育基本法に則り学術の理論及び応用を教授するを以て目的とする。」当時の坂田祐学院長兼大学長は、1950年の『湘南評論』に次のように述べている。「本学院創立以来、『全世界にまさる』個人の霊性を陶冶し、十字架を負うて奉仕するの精神を函養せんとし

て、『人になれ、奉仕せよ』とは、常に高叫して来た基督教に根底を置く校訓である。基督教の根底なくして真の文化国家、平和国家の建設は出来ない。これは我が関東学院大学の確信である。」(『関東学院百年史』595、596頁)。当時、先生は五つの努力目標を語っている。第一は、図書館の充実、第二は、教授研究室の整備、第三は、礼拝堂の新築、第四は、教授陣の充実、第五は、神学部を設置であった。第三の「礼拝堂の新築」については、このように述べている。「礼拝堂の新築によって、大学の学的標準を高めると共に、学内の基督教精神の拡充徹底を促す。現在の礼拝堂は、旧海軍の食堂を改造したもので、甚だ不完全なもので、速やかに立派な礼拝堂の建設が必要である。」このように礼拝堂の建設は大学設立以来の宿願であったことがわかる。1951年の『学生心得』には、毎日行われている礼拝に、全教職員と共に全学生も出席することを原則とする、とある。大学礼拝が行われていた講堂は、現在の七号館のところにあった。そこには、大きな木造建1階が建っていた。北側は、三葉ホールと呼ばれる集会室があり、そこにオリーブの三葉のマークと鐘が取り付けられていた。この鐘は旧日本海軍の駆逐艦についていたものであったという。それが礼拝の時を告げる平和の鐘として用いられるようになったのである。南側は、講堂になっていた。記録によると、この建物の坪数は660.29坪、収容人員は、590人であった。古い旧海軍の食堂が別な高次の使命のために用いられていたのである。礼拝は月曜日から金曜日まで毎日行われていた。時間は、午前10時10分から40分であった。

岡本石根名誉教授は当時を思い出してこう記している。「工業専門学校の開設から昭和24年新制大学への移行の数年は、文字通り関東学院の嵐と窮迫の時代であった。貧しい建物と無に近い設備の中で苦闘が続いた。

が、学生と教職員がキャンパスに生活を共にして、その日常性と職場の連帯感が、学内を意外に明るく楽しいものにしていた。戦後ながら、新しい希望があったから。

戦時技能者の大食堂は、心の「かて」をおくる礼拝所に変わり、平和の使者となった。切妻の屋根につけられた三葉のしるしと鐘は、貧しいながら学校のシンボルであった。このマニフェストは、批判の中にも、ともかくも心の支えとなっていた」(『関東学院通信』第7号)。

講堂内は、確かに必ずしも明るい照明ではなかったし、冬は暖房もない状態であったが、そこで毎日礼拝が行われ、物質的には豊かでない時代に、心の豊かさを養われたのである。

この講堂兼礼拝堂は、1965年に現在の七号館が建設されるために、取り壊された。その後、旧四号館418号室で礼拝が続けられた。ところが、1968年初夏にあった青雲寮の火災を契機に、本学も大学紛争の渦の中に巻き込まれてしまった。このため1969年2月から10月まで一号館、四号館、神学館が封鎖された状態だ

った。その間、神学部の廃止が決定され、チャプレン制度も存続することができない状態に至った。しかし10月以後は、大学礼拝は神学館礼拝堂で守られるようになった。この神学館礼拝堂は、鉄骨建で約115平方メートルの広さである。この場所が大学礼拝堂の役割を担ってきたわけである。この建物は1955年6月に完成したもので、神学館の主要部分は、コンクリートブロック造り、かつてはキャンパス唯一のコンクリートの建物であった。現在はその跡に経済学部棟が建てられている。

長い間の夢と祈りの実現

長い間、本格的な大学礼拝堂の建設が待望されてきたが、今それが実現されることになった。この礼拝堂はキリスト教主義大学のシンボルにふさわしいものとなるはずである。それと共に実質的な働きが期待されている。そこにおいて、大学の日頃の研究と教育に確かな深い意味づけがなされることになろう。またそこが学生と教職員の魂のふるさとの役割を担うことになろう。1988年12月15日に行われた礼拝堂の起工式においてヒンチマン学院長はこのように述べている。

「関東学院大学の礼拝堂の起工式を行うことができまして、まことにうれしく存じます。長い間、私たちはこのキャンパスに立派な礼拝堂ができることを夢み、祈ってまいりました。既存の建物に調和して、美しい礼拝堂ができることを期待しております。さらに重要な私の願いは、この礼拝堂が、関東学院大学の学生、教師、職員の心と目標をまとめるために役立つことあります。……中略……礼拝堂の起工式にあたり、私は一つの祈りを持っております。多くの若者が、世界の人々の重荷を取り去るために、ここから遣わされることとなりますように。」

今日、日本製品は世界にあふれ、日本人旅行者は世界の観光地に群がっているが、世界の恵まれない、貧しい人々のために奉仕する日本人は少ないといわれている。建学の精神がここであらためて継承され、展開されねばならない。

今年は、A・A・ベンネット召天80周年の年にあたる。また横浜バプテスト神学校創立105周年になる。このような年に、本学としては初めての本格的な大学礼拝堂が完成することは、まことに喜ばしい。冒頭に引用した献堂の讃美歌の意味するところを、私たちが心から味わうことができるのである。

かつてダビデは「見よ、わたしは香柏の家に住んでいるが、主の契約の箱は天幕のうちにある」(歴代上17:1)と言った。私たちの住居も、校舎もよくなってきている。今や大学礼拝堂を立派なものにする時が来たのである。

〔『大学チャペル・ブリテン第205号』

(1989.7.10発行)よりの転載〕

〔当時の文章をなるべく残したが、今の方々にわかるように削除・補足した。〕

新しくできたチャペル

関東学院大学 名誉教授 高 津 鐵 朗

この建物は多くの方々の知恵の集積。設計へのほくのかかわりはコンペ当選者星野喜野二氏の設計案に対する「意見」、それによる設計変更の段階からはじまる。ここでは、それ以降竣工までに考えたことの幾つかを述べたい。

「がらんどう」を見出すまで

この会堂に入って感じることは人それぞれに異なっていよう。けれども、大方の人々の印象に天井の高いことがあろう。会堂は二階床から船底天井の頂部までの高さが約十三米、およそ通常の大教室の三、四倍である。

この建物は二階建であるが三つの層をもつ。すなわち一階、第一層は日常的宗教活動のためのスペース、二階は上下二つの層に分かれ、第二層が集会する人々のスペース、そして、その上に床はないが第三層、ここは神のリアライゼーションをつかさどる、ことばの初源的意味での「がらんどう」（伽藍堂）であって、この層は一つ（oneness）で建物平面上の全体を被うスペースとすること。全ての光、全ての象徴的事物、全ての輝き、全ての色光はこの層に在って、そこに満ち、そこから降りそそぎ、目、耳、皮膚をとおして、聖なる実在に近づくための環境として働く。会堂の窓は外界を眺めるものではなく、光を導けばたりる。窓台は人々の背丈より上に位置させよう。正面のステンドグラスの十字架とその周囲の点開孔群、そして祭壇の円環状パネルのステンドグラスも思い切って上部につけよう。オルガンのステージも高くし、ベルタワー——一般の鐘楼のように独立した塔ではない。会堂全体がベルタワー、「インナー・ベルタワー」——も内部から仰ぎ見ることができて、目と耳から堂内に鐘の響きを伝えよう。また、太陽の直射光は先の高窓をとおして、その時でなければ生じない出来事の幾つかを演じる。晴れた日の早朝、太陽は祭壇背面にあって八つの円型パネルのステンドグラスがルビーの輝きをもたらす。午前十時四十分前後、陽は真横から射し込み、祭壇の衝立をなしているコンクリート壁はその真横にある梯子状のスリット窓から光を受けて、光と影のストライプに染まる。また、午後三時五十分前後には正面のステンドグラスの大きな十字架からの直射光は会堂の軸上に光の十字を描く。（これは会堂の方位、また、七号館にさえぎられて、冬季は軸上に廻るまでに消え

る。）

これらの光の出来事は、その時刻にもたれる礼拝や集会に特別なときを印し、また、休息、あるいは観想のために訪れる任意な多くの人々になぐさめと、自己の生の時間と自然の時の移行を視覚的に体得させる「陽時計」となる。

このように「がらんどう」の内部は、時は光に乗り、音は形象化され、光は音に変換され、相互に交歓し、混交し、時・空・光・音の錬金術の坩堝となる。ここはオルガン演奏のないときにも常に空間のミサ曲を奏でている……。

今、ふりかえてみると、ほくの言う「がらんどう」はゴシック聖堂のクリア・ストーリー（明層）あるいは、ポール・ティリッヒが語る sacred emptiness（聖なる空虚）のより不明確な同語反復であったのかもしれない。たとえそうだったとしても、設計のもやもやの中で見付けた「がらんどう」がこのチャペルの根本概念であったことに変りはない。

メザニン（中階）・アプローチに至るまで

会堂を二階に設ける場合、外階段で、その正面に導くことは自然の発想である。しかし、それには平坦なキャンパスの上に約五米（手摺を入れると六米）もの高い階段となり、このチャペルにふさわしくない権威主義的姿となってしまふ。そこで、真正面を避けて階段を図書館寄りにし、会堂側面よりのアプローチを試みた。だが、これは一階正面の入口と二階側面の入口という二つの主入口をもったようなあいまいさが残る。結局、外階段はあきらめて、一階より入り、でき得る限り大きな階段と吹抜を設け、内部ホールで上階との一体性を生みだそうとしていた。

そんなあるとき、チャペルの模型を囲んで幾人かの方々と話す機会にめぐまれた。色々の指摘があったが、特に複数の同席者から、直接軸方向から入れるべきだ、という強い意見がだされた。ほくは、それも種々試みたけれども、この場合どうも不自然で、先の「がらんどう」と入口ホール吹抜の垂直感によってまとめる今の案が、最適であると主張した。実施設計は完成し、工事契約間近なこともあって、そのように主張したけれども、よりよいチャペルであるために、もう一度、再考してみようと思った。今日見る外階段によるメザニン・アプローチはこのような過程をとって生まれた。

プラットフォームは地上三米弱に押えられ、両側の基壇状のアイビー植生が手摺を不要にし、盛り上った土畳は「胸突八丁の感」をまぬかれていよう。この階段はここに人々を招く末広りの扇形で、チャペル前庭の広げられた両掌、十本の放射する白タイルの指に受けつがれ、キャンパス空間全体、金沢地域を扇状に画す圍繞丘陵を、さらにその内の二本は夫々、釜利谷と小田原キャンパスを目指してもいよう。

この階段と前庭は、それぞれに、ローマのスペイン階段とシェナのカンポ広場の造形に学ぶところがあったかもしれない。

ファサードの点開孔群のこと

ある敬虔なクリスチャン科学者は、その夜景を見て、いつもクリスマスのように派手すぎると、またある牧師の方はブドウの房を、イスラエルの民とブドウ、キリストの象徴としてのブドウを想った、と語られた。そして、今までに接した学生諸君の反応の多くがこのパターンに集中している。

このデザインは、昨年度のある短大生の提出作品からのヒントによっている。正面に大きな十字をうがったことは決めていたが、このヒントによってランダムな点開孔群を伴奏させるデザインに展開した。

このファサードは、カトリック的な具象イメージを排しながら、抽象象徴次元で受難のファサードを、また、対面する祭壇側のそれは復活のファサードとしよう。それぞれに青系及び赤系ステンドグラスを主調にして対比関係をうみだす。共に十字と円群の主題によりながら、両者の主従関係を逆転させ、両要素の造形秩序を対位させ（規則性とランダム）、また、両者の色彩を両要素逆転対比させることによって、「がらんどう」の両妻壁を形成させよう。二磁極のようにその間にはさまれた空間を励起する仕掛けとする、初期のもくろみはこれでできあがった。

この両ファサードはアントニオ・ガウディのサグラダ・ファミリア（聖家族教会）の受難・生誕の両ファサードに触発され、また後者のルビー色の八つの円形パネルは、師、今井兼次の手になる質素な会堂での氏の葬儀のとき一式場が混んでいたとはいえ、なんでも、多分、ほくはそれまでうつむいていたのだろう—突然あらわれた円開孔の美しかったデザインの引用である。

この点開孔群は会堂全体の欠くことのできない一要素である。丁度、オーケストラの鳴り響く種々の楽器の音色のひとつのように全体の中で緊密に働いている部分、即ち「がらんどう」の詩を奏でている一部分である。人は音楽についてその部分の音が何を意味するのかを問いはしない。そこで問われることは全体の中

で生きているのか、不調和かである。

音楽の比喩は、このデザインが意味するものの基本的内容であるけれども、建築は音楽と違って具体的存在物でもある。この面で、先に指摘された、クリスマスツリー、ブドウの房、そして、天の川、キリストの磔刑、星座、天使達、水滴、シャボン玉、キリストを囲む光、雪、パイプオルガンのきれいな音の響き、光のはねたわむれ、まだまだあろう……。と意味されるものの連想連鎖をうみ、独立した象徴物の性格を強める。

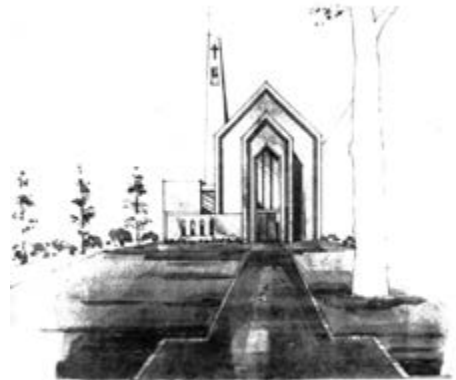
ほくは、それらの還元的イメージのすべてを容れて、ハンス・アルプのある作品名を仮りて、「解釈に適合する形態」と言おう。

ティリッヒは、学習を要する象徴的パターンは真の象徴の力をもたない、といい、哲学者ランガーは記号と象徴を論じて、真の象徴とは本質的に多義的解釈を与えるものである、という。

ほくは象徴についてのこの二人のいうことに賛同する。

紙面を使いすぎた。おわりに智の中枢の図書館と心の中枢であるこのチャペルが対比的一對をなし、この大学の活動の母体となり、また、この大学の精神の象徴となることを念じて筆をおく。

〔『大学チャペル・ブリイテン第209号』
(1990.1.10発行)よりの転載〕



外観透視図



礼拝堂内部透視図

関東学院大学礼拝堂

プロポーザル・デザイン・コンペティション 入賞作品（星野喜野二作）
新しい大学礼拝堂の建設計画に際して、プロポーザル・コンペティションが行われ、応募作品の展示が行われた。（1988.6.15～28）

室の木礼拝堂パイプオルガンについて

関東学院 学院史資料室 外 崎 みゆき

室の木礼拝堂（写真1）のパイプオルガンは関東学院女子短期大学が関東学院100周年を記念して設置を行ったものである。短期大学から大学へと改組が行なわれたこともあり、この学院内最大規模のパイプオルガンに関する資料は非常に少ない（資料をお持ちの方が居られたら、ご一報いただきたい）。



写真2 室の木礼拝堂パイプオルガン（2015年）

発見した唯一の学院内資料は関東学院女子短期大学の卒業生が発行している『香葉』（同窓会誌）で、「母校ニュース『パイプオルガン 完成！』」（1989年 No.18）という掲載がある。記事によれば、パイプオルガンはゲオルグ・ヤンにより作成されたドイツ製の楽器で、日本における第一号器であること、33ストップ、3段鍵盤などの情報が記録されている。

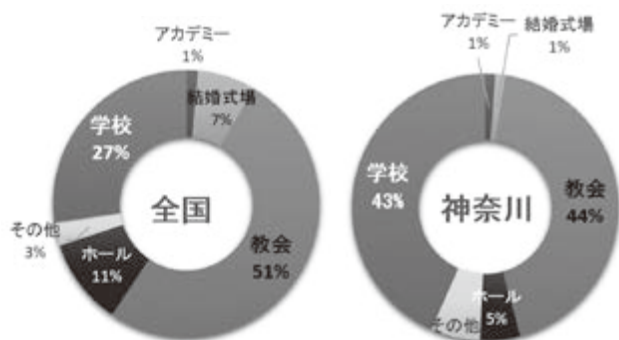


図1 用途別の設置数



写真1 室の木礼拝堂外観

手元の資料によると国内に設置されて

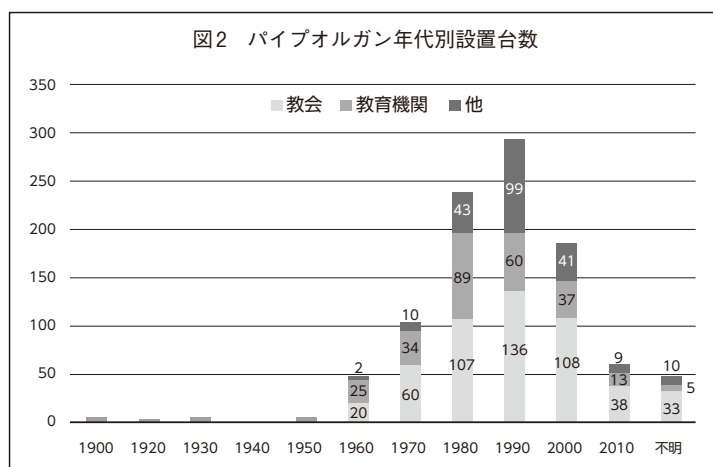
いるパイプオルガンは約1000台で、神奈川県は83台と東京の285台に次いで全国第2位の設置台数である（以降、兵庫、北海道、大阪、愛知が続く）。

パイプオルガンを用途別に見ると、全国統計では51%が教会に設置されており、教育機関（学校関係：幼稚園～）は27%、コンサートホール11%、結婚式場7%である。しかし、神奈川県に限ると、その割合が異なり、教会44%、学校関係43%と教会と学校関係の設置台数はほぼ同じである（図1参照）。これは神奈川県下にキリスト教学校が多いことが、特色として現れたためと推察する。

既存資料が少ないことから、パイプオルガンに関する一般的なデータにより、室の木礼拝堂に設置されたパイプオルガンを評価する。

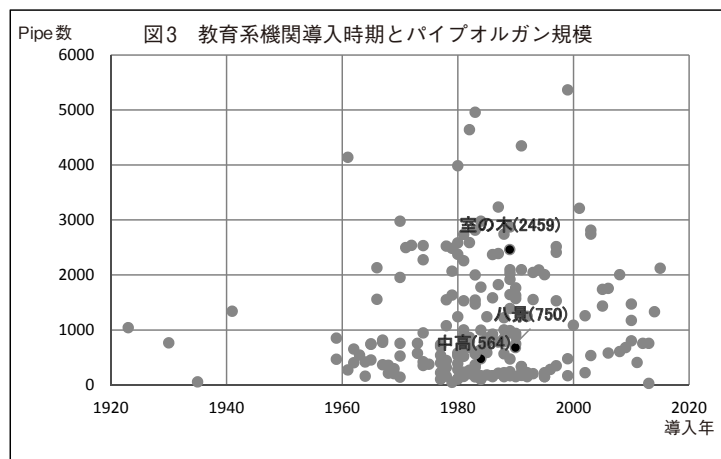
多くの場合、パイプオルガンの規模はパイプ数やストップ数で評価されるが、全国でもパイプ数が2000本を越える大規模なオルガンは96台と一割程度である。更に学校関係（242台）に限ると41台である。

関東学院大学室の木礼拝堂に設置されているパイプオルガンはパイプ数が2459本、33ストップ、3段鍵盤とペダルを有する、国内でも大規模な器材である。



設置年代別に教会と教育機関を比較した図2で著明であるが、国内のパイプオルガンは1980年代と1990年代に設置数が多く、教育機関については1980年代が、教会については1990年代が設置のピークである。

学院内に設置されているパイプオルガンには大学八景礼拝堂のパイプ数 750 本、関東学院中学校高等学校の 564 本などがある（図 3）。また、学院内で現在、使用されているパイプオルガンの設置時期は中学校高等学校のものが 1983 年、室の木礼拝堂が 1989 年、八景礼拝堂 1990 年、六浦中学校・高等学校が 1996 年である。更に現在、小学校のパイプオルガンが草薙オルガン工房にて製作中である。スペック詳細は編集後記表を参照。



大学におけるパイプオルガンの歴史は更に古く、1990 年に八景礼拝堂の新設に伴い、取り壊された旧礼拝堂に設置されていたパイプオルガンを日本バプテスト同盟霞ヶ丘教会に貸与した。同器は翌年（1991 年）に関東学院大学から正式に移管され、教会により大切に整備され、今も礼拝で美しい音色を響かせている。

室の木礼拝堂のパイプオルガン製作者である Georg Jann（以降 G. ヤンと記載）は本学の二年後（1991 年 12 月 22 日）に仙台青葉荘教会のパイプオルガン（作品番号：186）を製作しており、同教会オルガニストの新藤典子によれば、設置に際して多くの教会、大学を見学したとある。本学の記録には残されていないが、G. ヤンの国内第一号器を持つ本学も訪問したと思われる。

大学の設置事例では本学より 4 年遅れて、G. ヤンの製造するパイプオルガンが大妻学院大妻講堂に設置されている。大妻学院大妻講堂のオルガン（作品番号：196）のパイプ数を確認できる資料はないが、3 段鍵盤でストップ数がほぼ同数であるので、本学（室の木礼拝堂）のものと同規模のパイプオルガンであろう。

G. ヤンは 1980 年のセントジョセフ教会をはじめ、多

くの教会にオルガンを設置した。工房をバイエルン地方に移した後、1985 年に 103 ストップと演奏鍵盤を 2 セット持つ彼の最大規模のオルガンをヴァルトザッセン教会（Stiftsbasilika Waldsassen）に設置した。彼はバンベルク交響楽団のためのコンサートオルガン（74 ストップ）も手がけ、1994 年のミュンヘン大聖堂のパイプオルガン製作を最後に 1995 年にオルガン工房を引退した。彼の製作したオルガンは活躍したわずか 30 年間に約 280 台（作品番号は 1-200）に及ぶが、1989 年に製造された室の木礼拝堂のパイプオルガンは G. ヤンが熟練期に作成した「作品番号：155」の名器である。

オルガン学会に寄稿された論文によると、筆者でオルガニストである小林英之（上野学園大学音楽学部音楽学科教授）は「関東学院女子短期大学のオルガン」について幾つかの報告をしている。「西ドイツのオルガン建造家、G. ヤン氏の日本での最初のオルガン（3 段手鍵盤とペダル、33 ストップ）が関東学院女子短期大学講堂に完成し、1989 年 11 月 5 日にジグムント・サットマリー氏^{*1}によって柿落としが行われた。」と当時のコンサートの記事があり、同報告の中で「設置場所が大教室を兼ねた礼拝堂（2 階席を含め約 600 名の収容人員）であるため、音響よりも人の話を優先するとし、[中略] 響きが無いと言うよりはむしろオルガンの音が半減してしまうほど吸音効果の高いところに置かれている。」と音響効果に関する所見を述べている。更に氏は、「このオルガンが本来必要としている音響を与えられたとき、色々な可能性と側面を見せてくれるであろう。」と結んでいる。^{*1} Zsigmond Szathmary、1939 年生

学院内最大規模の室の木礼拝堂のパイプオルガンの音色を今後も多くの方に楽しんでいただけるようチャペルコンサート^{*2}を継続し、新たな演奏会の企画も検討したい。^{*2} 毎週木曜日 12:30-12:50、無料、一般公開

◆ オルガンビルダー Georg Jann (G. ヤン) の略歴

- 1934 年 ベルリン (Berlin Kalkberge) にて誕生
- 1948 年 オルガンビルダー Alexander Schuke に弟子入り後、レーゲンスブルグ、スイス、ベルリンで修行
- 1974 年 Eduard Hirnschrodt が創設した老舗工房を後継
- 1980 年 Memmingen, Kath. Stadtpfarrkirche St. Josef セントジョセフ教会 Disposition: 52/IV Opus: 47
- 1994 年 München, Liebfrauentom, Hauptorgel ミュンヘン大聖堂 Disp. 95/IV Opus: 199
- 1995 年 息子トーマスに工房を引き継ぎ、引退

【参考文献、参照 URL】

- 母校ニュース (1989)「パイプオルガン 完成」『香葉』、18、p.24、関東学院女子短期大学
- 小林英之 (1989)「関東学院女子短期大学のオルガン」、『年報「オルガン研究」』、17、p.81-83、日本オルガン研究会 Japan Organ Society
- 佐々木敏郎 (1992)「新会堂献堂に至る経緯について」、『霞ヶ丘教会最近十年の歩み』、p.51、霞ヶ丘教会
- Wikipedia「Georg Jann」https://de.wikipedia.org/wiki/Georg_Jann (1915/12/21 参照)
- 武田高太郎「オルガン探検家」<http://www.5b.biglobe.ne.jp/~organ-ex/> (1915/12/21 参照)
- Thomas Jann Orgelbau GmbH <http://www.jannorgelbau.com/> (1915/12/21 参照)

「大学礼拝堂、宗教行事とパイプオルガン」

関東学院大学 宗教主任 村 椿 真 理



「オーバーホールを終えて草薙オルガンの新たな音色」コンサート



「シェクスピアと音楽」コンサート

本学のパイプオルガンは、金沢八景キャンパス礼拝堂と室の木礼拝堂の二箇所に設置されていますが、それぞれの礼拝堂で、礼拝を中心としたさまざまな宗教行事、大学式典、大学宗教教育センター主催チャペルコンサートなどが行われ、オルガン演奏がなされてきました。

1. 金沢八景キャンパス礼拝堂ですが、基本的にこれまで、授業の行われている期間の火曜日夕方と木曜日昼休みに、各 20 分間の大学礼拝が休むことなく継続されてきました。木曜日の礼拝は献堂の 1989 年以来今日に至ります。礼拝における音楽が中心でしたが、短い時間とはいえ奏楽者は前奏曲などに工夫を凝らし、楽譜を選び、優れた演奏が常に目指されています。オルガンは草薙徹夫氏の製作によるもので 1990 年に本学礼拝堂に献納されました。

礼拝同様、チャペルコンサートが、こちらも授業が行われている期間の木曜日夕方、金曜日の学生の昼休みと事務職員の昼休みの週 3 回、礼拝同様 20 分間で行われています。

これは 1990 年の 5 月 18 日から始まり、現在（2015

年度秋学期）に至るまで、既に 1,861 回を数えます。パイプオルガンの宗教曲演奏だけでなく、声楽、フルート、リコーダー、バイオリンなどの共演も行われました。定期的コンサートとして定着し、キャンパス内にオルガンの音が響きわたるキリスト教大学らしい雰囲気作りに何よりも貢献してきました。その中で、度々特別企画も行われ、「花子とアン」コンサート、創立 131 周年記念企画パイプオルガン設置 25 周年「オーバーホールを終えて草薙オルガンの新たな音色」コンサート、初の試みとして演劇と音楽のコラボ、「シェクスピアと音楽」コンサートなども催されました。コンサートには外部の一般聴衆も訪れ、施設からお体の不自由な方々の参加や、仕事帰りの方々、赤ちゃんを抱いたお母さんの参加もありました。

その他、過去には、大学主催地域交流「ふれあい祭り」におけるオルガンコンサートの実施、毎年恒例としては、大学祭「平潟祭」におけるチャペルコンサート（15 分間）が土日にわたり各 6 回ずつ行われており、そこでの延べ参加人数は毎年 5,600 名に及んでいます。

大学の諸式典でもチャペルは毎年会場として用いられますが、特に春学期卒業式、学院主催で行われる創立記念祈祷会などでは常にパイプオルガンが奏楽を担当し、厳かな式典が執り行われています。

2. 室の木の礼拝堂は 1987 年、当時の関東学院大学女子短期大学 5 号館のチャペルとして献堂され、パイプオルガンが設置されました。現在の礼拝は、大学に改組されて以来継続されているものですが、毎週金曜日お昼休みの時間帯八景キャンパスと同じ所要時間で行われてきました。

オルガンは 1989 年製、元西ドイツ、ゲオルグヤン社製作のもので、八景キャンパス礼拝堂のオルガンとは、響き、音色の異なるこちらも素晴らしいオルガンです。チャペルコンサートは室の木キャンパスでも実施され、2007 年 4 月から現在に至るまで、239 回のコンサートが行われました。もちろん短大時代の、大学礼拝、諸式典もそこで行われ、その度にパイプオルガンが演奏されてきました。特別チャペルコンサート、室の木のチャペルコンサート 200 回を記念したコンサートも実施されました。

どちらの礼拝堂においてもパイプオルガンは、その役割をよく果たし有効に用いられてきたといえます。

また、時には学生がオルガンに触れる機会を設けたり、志願者にオルガン練習の機会を与えたりしたこともありました。さらに卒業生の結婚式にもチャペルは使用されています。大学宗教主任の司式で挙行され、そこでもパイプオルガンの音が高らかに響いたことは言うまでもありません。今後も、より充実した宗教行事に両オルガンが豊かに用いられていくことでありましょう。

「中学校高等学校礼拝堂と礼拝、宗教行事」

関東学院中学校高等学校 宗教主任 佐藤 洋 晴

関東学院中高では、現在、「グレースセット礼拝堂」と「メービー礼拝堂」が使用されています。旧中学校校舎にも、「テンネー礼拝堂」がありますが、残念ながら校舎の取り壊しを余儀なくされ、近々お別れをしなくてはなりません。

「グレースセット」「メービー」「テンネー」は、すべてアメリカバプテスト教会のメンバーであり、グレースセット先生とテンネー先生は、長期に渡って日本に滞在され、実際に関東学院の一員として大きな働きをされました。今在学している生徒たちは礼拝堂の名前として、日常的に「グレースセット」「メービー」という先生方の苗字を口にしてるのは、よく考えると不思議な事です。今となってはグレースセット先生もメービー先生も時代を超えて自分の苗字が日本で呼ばれている事を知る術はありませんが、もし、知ったら不思議に思うかもしれません。しかし、先生方の関東学院への思いを振り返ると、関東学院がキリスト教を土台として存続し続け、今でも、自分の苗字から取られた名前と呼ばれる礼拝堂で礼拝が行われている事を喜んでくださるのではないかと思います。

私自身も宗教主任室がグレースセット礼拝堂の中にある事もあり、時々グレースセット先生はどのような人であったのか振り返る事があります。2014年、グレースセット先生の墓所が多磨霊園から武蔵野霊園の共同墓地へと移

されました。その時に、多磨霊園にあった先生のレリーフの一つが、グレースセット礼拝堂前に移設されました。「基督にありては、東も西もなし」と刻まれている言葉は、戦時下も日本に留まり、キリストにおいて日本を愛して下さったグレースセット先生の人柄をよく表していると感じます。そして、グレースセット礼拝堂で行われる礼拝やキリスト教行事では、これからもキリストを通して示される神の計り知れない愛と恵みが語られ、東も西も無い平等で平和な世界への道が確認されなければならないと感じます。



旧中学校本館テンネー礼拝堂

「六浦中学校・高等学校礼拝堂と礼拝、宗教行事」

関東学院六浦中学校・高等学校 宗教主任 伊藤 多香子

学校が成立するには、「生徒と教師」が必要です。六浦中学校・高等学校は「長い間準備を重ね設備を充実させてから創立された学校」ではありません（関東学院125年史188ページ）。少し乱暴な表現になりますが、「生徒と教師がいたので学校として歩み始めた」、ということもできる学校です。そのため、教育環境の整備は始めからの課題であり、校舎や体育館などは少しずつ整えられていきました。校舎の建設、体育館の建設を終えて念願の礼拝堂が建設されたのは、六浦中学校・高等学校の歩みが始められてから24年を経た1977年2月のことでした。当時の状況から仕方のないことだったのかもしれませんが、バリアフリーとしての対応が十分にできていないことが悔やまれます。約800名を収容できる施設として建設された礼拝堂は、今では六浦祭など生徒会活動のステージとして使用されることも、講演会、保護者会、学校説明会に使用されることもあり、講堂としての役割も果たしています。

この礼拝堂にパイプオルガンが設置されたのは、礼拝堂の改修工事が行われた1996年でした。同窓会組織である「六葉会」の支援に支えられての設置となりました。

たが、卒業してからも大切な場であることを実感された卒業生ならではの想いが表れているように思います。

生徒は、毎朝登校すると教室に鞆を置き、聖書と讃美歌をもって礼拝堂に集まります。礼拝堂に入ったその瞬間から、友との会話をやめ、心を静めて「神の前に立つ人間」であることを意識するようにと伝えられます。礼拝堂に入るまでの世界とは異なる世界に足を踏み入れることで初めて見えるもの、聞こえるものがあるからです。そしてそれが本校独自の教育であるからです。



「小学校礼拝堂と礼拝、宗教行事」

関東学院小学校 校長 岡 崎 一 実

2014年8月に竣工した新校舎の4、5階部分に、新しい礼拝堂があたえられました。関東学院小学校におけるキリスト教教育の象徴となるこの礼拝堂、座席が階段状になっているので、最大600人という大きな収容人数のわりに一体感のある施設となっています。ふだんの礼拝だけでなく、入学式・卒業式、学習発表会といった学校行事や、入試広報のための学校説明会など、多目的に活用できるよう、ぜひいたく照明・音響・ビジュアル設備をそなえています。

小学校では毎週金曜日の朝、この礼拝堂に全校児童があつまり、礼拝を守っています。児童の司会（ときに奏楽も）で賛美歌をうたい、聖書のお話を聞き、心をととのえて一日をスタートします。低学年、高学年ごとの礼拝、賛美歌練習も、曜日を定めた日課となっています。

年に10回ほどある特別礼拝には保護者のみなさんにも参加をよびかけ、文字どおり学校全体で礼拝を守るようにしています。イースターやクリスマスなど5つの特別礼拝は、近隣教会の牧師先生に1年を通じてお話をお願いしています。また、創立記念礼拝は各界で活躍されている本校卒業生を、国際理解礼拝はルワ

ンダで和解と平和のための活動をされている佐々木和之さん・恵さんを、友を知る礼拝は献金の送り先の学校や団体の方をそれぞれお招きし、知ること、伝えることをたいせつにして祈りをあわせています。

現在、この礼拝堂にパイプオルガンを奉献する計画がすすんでおり、2016年冬には完成の予定です。大学礼拝堂とおなじ草薙オルガン工房の制作によるもので、子どもたちの賛美の歌声とともに礼拝堂に荘厳な音色がかなでられることでしょう。



「六浦小学校礼拝堂と礼拝、宗教行事」 六浦小学校創立65周年記念オルガンコンサートを開催

関東学院六浦小学校 校長 石 塚 武 志

六浦小学校は、1949年の創立です。2014年に65周年を迎えました。

長年、六浦小学校の音楽教育を担ってきた故田上雅章教諭が愛用していたオルガンは、老朽化のために、買い替えが必要となりました。

2013年度からの第一期テーマ募金において、当初パイプオルガン購入の話を進めていましたが、オルガニストの意向、礼拝堂の構造、制限される舞台面積等を再検討し、購入を断念しました。パイプオルガンに代わるものとして、検討を進める中で、ローランド・ロジャース社の最新鋭電子オルガンと出会いました。本物のパイプオルガンの音色を厳密に再現し、また多彩な音色での演奏が可能で、メンテナンスはほとんど不要です。今後、礼拝堂改築があった場合にも移設等が容易です。しかも、パイプオルガンと比べると非常に安価であることなど、すべての条件がそろいました。

テーマ募金への寄付を依頼したところ、1年を待たずして満額以上の寄付が与えられましたことは感謝です。夏休み中に礼拝堂に設置し、9月から使用を開始しました。

2014年12月20日（土）新しいオルガンによる初めてのクリスマス礼拝です。聖歌隊の入場の音楽、聖歌の伴奏、ページェントの進行、全校児童による賛美歌の伴奏を、神様にお捧げすることができました。

クリスマス礼拝の後、ご寄付をいただいた皆様、卒業生、学院関係の方々をお招きして、創立65周年記念オルガンコンサートを開催しました。本校教員でオルガニストの大日向聡子の演奏により、オルガン曲をお聴きいただきました。曲目は下記の通りです。

「高き天より我は来れり」（パッヘルベル）／「トッカータとフーガ ニ短調」（J.S. バッハ）／「シャコンヌヘ短調」（パッヘルベル）／「スイスのノエル（グラン・ジュとデュオ）」（L-C ダカン）／「2つのノエルによる奉献曲」（A. ギルマン）／『ゴシック組曲』より「ノートルダム（聖母）への祈り」「トッカータ」（ボエルマン）

これからも、オルガンの演奏とともに、オルガンの音色に合わせた子どもたちの歌声で、心から神さまを賛美する礼拝を捧げてまいります。



「のびのびのば園 礼拝堂（ホール）」

関東学院のびのびのば園 園長 河 合 輝一郎

2012年春に、新しい園舎が完成し、幼保一体の認定こども園として再出発しました。広々とした保育室をはじめ図書室、ランチルーム、青空テラスなどが新設されています。

礼拝堂も新しくされましたが、多目的ホールとしての機能も併せ持っています。園舎2階の一番奥にありますが、毎日の礼拝だけでなく、雨天時には様々な遊具（トランポリン・鉄棒など）を置いて、子どもたちがのびのびと活動しています。ホールに入ってすぐ左側の壁面にはクライミングが設置されており、子どもたちが夢中になって上り下りを繰り返しています。

入って正面には舞台があり、十字架が掛っています。厳かな礼拝堂という雰囲気はありませんが、入園進級式や卒園式、毎月行われる誕生日会、イースター礼拝、花の日礼拝、クリスマス礼拝など、乳児から年長組までが一堂に集まって神さまに礼拝を捧げています。こども讃美歌を歌う子どもたちの声がホールいっぱいに響き渡りますが、そこに神さまの豊かな恵みを感じます。一人ひとりの子どもたちの成長を静かに見守っているイエスさまのまなざしがそこにあります。私ども

は礼拝を通して子どもたちの心に神さまの愛の種を蒔き続けています。お祈りをする時の子どもたちの真剣な表情がとても印象的です。「先生、神さまのお話をしてくれてありがとう。」と声をかけてくれる子どもの気持ちがとてもうれしく感じます。

また、年に3回上演される「ひとみ座」の人形劇や、六浦中高生図書委員による影絵などのイベント会場としても十分に対応できるスペースを持っており、子どもの情操面の育成に大きく関与しています。



「ステンドグラスのあるいのりのホール」

関東学院六浦こども園 園長 根 津 美英子

2013年に建てられた、六浦こども園新園舎の3階ホールは「いのりのホール」と名づけられました。設計の段階でどうしてもステンドグラスをどうしても設置してほしいとお願いしました。それはこども園が子どもたちにとって「ふるさと」のような存在になることに加え、キリスト教保育の中で、愛された、大切にされたという思いとともに、子どもたちの心象風景としてステンドグラスが刻まれてほしい、という願いがあったからです。すばらしいグラスアーティストで、敬虔なクリスチャンでもある三浦啓子氏との出会いの中、ステンドグラス設置が実現しました。デザインは何度も相談を重ね、羊飼いであるイエスさまが、羊たちを優しく見守り、光に満ちた空には神さまの使いであり平和の象徴である鳩がオリーブの葉をくわえて飛んでいる（旧園章のデザイン）図柄に決まりました。三浦氏は旧園舎で出会った子どもたちの顔を思い出しながら、羊の顔を制作しました、と嬉しそうに語りました。天使や蝶々など可愛いデザインの小さなステンドグラス4つも加わって、いのりのホールはイエスさまの愛と祝福と優しい光に満ちた温かい空間となっています。時間や季節によって異なる表情を見せるガラスの美しい光が降り注ぐ中、礼拝や様々な行事が行われています。クリスマスシーズンには夜間、室内ライトを灯して、近隣の方々にステンドグラスを楽しんでいただいています。いのりのホールは講演会等で地域の方々も多く集います。本園の教育の土台にあるところのキリ

スト教と神の愛を感じる場であってほしいと願っています。何よりも子どもたちの内に映し出されたステンドグラスと共に、イエスさまの愛と信じる心が刻まれることを心から願います。



学院史資料展 2015

「建学の精神と校訓『人になれ 奉仕せよ』」の教育

のびのびのば園からの報告

「自分を愛するようにあなた方の隣人を愛しなさい」

～ レビ記 ～



この世に生を受け1年に満たない赤ちゃんから、6歳までの幼子達が共同で遊び、生活する子ども園。やさしさの種を大きく豊かに実らせていく子ども達の様子をお伝えいたします。

イエス様から愛の種をいただき、共に育っている子ども達。日々の礼拝、学年毎の礼拝、キリスト教歴の特別礼拝を通してみ言葉を聴き、祈ることを覚えていきます。目には見えない、触れることもできないイエス様ですが、確かに共にいて下さる存在となっていくます。



花の日礼拝や感謝節礼拝ではご家庭の協力も得て持ち寄ったものをお届け訪問しています。小さい子ども達は、日頃から慣れ親しんでいる方々へ手渡しすることで、ぐっと信頼関係が深まります。

年長児になると1.5キロほど離れた特別養護老人ホームの方々へ誕生カードを毎月作成してお届けします。子ども達の来所を楽しみに待っていて下さり、車いす生活の方や、握手する時に感じる細くなられた指、手の皺1本々々からも「愛おしく思っているよ」とぬくもりが伝わります。「帰っちゃうのが寂しくて泣いてた、また来ようよ」とありのままを受けとめる感性も育てていただいています。

たくさん愛され、大事にされた体験が友達や他者への関心へと広がり、自分と同じように大切な存在へとなくなっていくのだと思います。仕えることと喜びを与えられることの両方を園生活で育んでいます。



(関東学院のびのびのば園)



六浦こども園からの報告 支援のバトンをつなぐ

◆クッキー作り

毎年、年長組の子どもたちはおりふ祭（バザー）で手作りのクッキー「コロコロクッキー」を作って販売します。生地作りから成型までボランティアのお母様方に手伝って頂きながら、沢山の数のクッキーを友達と協力して楽しく作る事ができました。



◆クッキー屋さん・販売の様子

おりふ祭当日は、少し緊張している子もいましたが、一人ひとりエプロンを身につけ「本物のクッキー屋さん」を経験しました。「いらっしゃいませ〜！」と大きな声で呼び込みしている子がたくさんいました。また、お客さんからチケットを受け取ると少し恥ずかしそうに「ありがとうございました」と言ってクッキーを手渡していました。



◆お手紙を書く

収益は、関東学院で支援しているタイのティワタ寮に献金します。学校が遠くて通えない子ども達と一緒に生活している「ティワタ寮」の話聞いて、献金に添える手紙を書きました。絵を描く子、伝えたい言葉を考える子、どんな手紙が良いかアイデアを出す子…子どもたちは手分けをして書いていました。

◆献金を預ける

8月にティワタ寮に行かれる関東学院六浦小学校の先生に、子どもたちは献金を託しました。

預かって下さった石塚校長先生はタイの民族衣装を身に着けて、ティワタ寮のお話をしてくださいました。子どもたちは、石塚校長先生から「タイ」という国を感じ、興味を持って話を聞くことができました。

（関東学院六浦こども園）



六浦こども園の園児から六浦小学校第14回タイ訪問団に託された献金は、六浦小学校の団員（小2）よりティワタ寮の寮長 ソムサック氏に届けられた。

（編集部）



六浦小学校からの報告



「私たちの祈り」

第14回タイ訪問団が今年もタイの山奥、カレン族の村を訪れました。今回の参加者は、4名の児童とその保護者の方々に加えて、卒業生や学院関係者を含めて23名でした。ティワタ寮には、学校に通うために親元を離れて暮らす幼稚園児から高校生までの子どもたちが130名います。元来カレン語を話す彼らにとって学校で教育を受け、タイ語習得を始め基本的な教養を身につけることはタイ社会で生きていくためには欠かせないことです。私たちは少しでもそのお手伝いができることを願って活動を続けています。

小学校時代にこのような活動に参加することはたいへん意味のあることだと思います。まず、友達になること、そしてその子の暮らしを知ること、それが人のために何かをする動機となったとき、その働きは形に縛られず開かれた可能性を持ちます。下に紹介する文章を読むと、参加者の出川真衣さんがその一歩を踏み出したことが分かります。「祈ること」が彼女のスタートです。

「ティワタリょうの子とわたしのちがうところは、ことばとたべものくらすところとようふくでした。たべものはおかゆでした。くらすところはせまかったです。ようふくはすくなくかったです。同じところは、考えていることや思っていることです。だから、ことばはつうじなかったけど、いっしょにあそべました。あと、かみさまに、いつもあいされているから、日本の子もタイの子もまずいい人たちもみんな生きていられると思います。タイの子たちは、まずしかったけど、とってもやさしかったです。ことばはよくわからなかったけど、きっといつもおいのりをしているからだと思います。ごはんをたべる前やねる前にも、わたしも『タイの子たちにごちそうをたべさせてほしい』とお祈りしようと思いました。」
(2年 出川 真衣)

私たちができることは本当に小さなことですが、神さまがそれを豊かに用いてくださることを信じてこの活動を継続していきたいと願います。

(関東学院六浦小学校)



小学校からの報告

「届きました！主を賛美する歌声、そして音色」



「主はすばらしい、主はすばらしい、主はすばらしい、わたしの主！」スクリーンには子どもたちのほじける笑顔が映り、鍵盤ハーモニカの明るい音色と喜びに満たされた歌声が礼拝堂に響きました。ビデオの中で演奏、そして歌っているのはルワンダの子どもたちです。

関東学院小学校では2005年から、ルワンダで平和と和解のためにはたらいっていらっしゃる佐々木和之さん・恵さんを支援してきました。6月29日（月）にはご夫妻の一時帰国にあわせ、8年ぶりに恵さんをお招きして国際理解礼拝をまもりました。



貧しい家庭の子どもたちのために建てられたPIS＝ピース・インターナショナル・スクールという学校が首都キガリとニャンザという二つの町にあります。PISで恵さんは日本語などの授業を持たれているそうです。そのうちニャンザの学校（正式名称はニャンザ・ピース・アカデミーです）のようすを恵さんが礼拝の中でお話してくださいました。その際「主はすばらしい」という賛美歌を鍵盤ハーモニカで演奏し、日本語で（！）歌う子どもたちのようすをビデオで紹介してくださいました。子どもたちはリズムにのってたのしように体を動かして、心から神さまを賛美し感謝しているようすがつたわってきました。



小学校では佐々木さんをとおしてPISに鍵盤ハーモニカをおくってきました。子どもたちが1、2年生のときに学校で使ってきたものを寄付したものです。「PISの子どもたちは鍵盤ハーモニカが大好き。台数が足りずに5年生だけが使っているのを4年生がうらやましそうに見ているんですよ」と恵さん。PISで役立ててもらおうとおくった鍵盤ハーモニカですが、その鍵盤ハーモニカでの演奏がこんどは小学校の子どもたちの心をうきうきと楽しくさせてくれています。そして賛美の歌声は、神さまを賛美する喜びをつたえてくれました。支えているつもりが支えられている、恵さんのお話をうかがいながらそんなことを感じました。

（関東学院小学校）



六浦中学校・高等学校からの報告



『東北“福幸”支援』

この活動は2011年の夏休みに、サッカー部の高校生が岩手県を訪れたことがきっかけとなってスタートしました。当時は瓦礫の撤去作業や、側溝の泥出し、冠水した農地や耕作放棄・休耕地の復耕支援などや、吹奏楽部の有志が仮設住宅を訪問して、ミニコンサートを開催したりしていましたが、現在では漁業支援や仮設住宅にお住まいの方々が、憩いの場として集える農園づくりのお手伝い、そこで生った野菜を収穫する作業、サンタクロースに扮して仮設住宅や保育園などを訪れてプレゼントを配って回ることに、語り部の方々から様々な思いを伺うなど、時の流れとともに被災地支援のニーズが変化し、作業も多様化しています。また12回目となる活動(夏季)は、関東学院大学との協働として行いました。「できる人が、できる時に、できることを」このボランティア活動の原点を忘れずに、被災地が被災地と呼ばれなくなるまで、この福幸支援を続けていきたいと思っています。

「東日本豪雨災害 ボランティア」

9月22日(火・国民の休日)に、生徒64人と引率教員が豪雨災害に見舞われた茨城県常総市へボランティア活動に行きました。石下町小保川田園都市センター(公民館)の清掃活動は、床上1m近くまで浸水した地域で、午前中は大広間の畳上げとキッチンの泥出し作業です。男子グループは、まず最初に畳上げです。乾いた畳は2人でも運べますが、水を含んだ畳はかなりの重さのため、4人でやっとの思いで運び出しました。女子グループはキッチンにもかなりの泥が残っていたので、ホースで水を撒きつつ、デッキブラシとドライワイパーを使って泥の掻き出し作業をしました。午後はセンターの周囲の清掃を中心に作業を行いました。帰りは連休中の渋滞に巻き込まれ、予定より大幅に遅れて19時30分に学校に到着となりましたが、活動に参加した64名の生徒たちは、被災地の現状を目の当たりにし、活動を通していくつものことを学んだ様子でした。

(関東学院六浦中学校・高等学校)





中学校高等学校からの報告 「ダンス同好会の活動」

本校のダンス同好会は、初めての挑戦として、8月に福島県いわき市で開催された、全国高等学校フラ・タヒチアン競技大会『第5回フラガールズ甲子園』への出場を果たしました。この大会の理念は、踊りを研鑽する中で、社会性を身につけ豊かな心と健全な体を育む。全国の高校生が触れ合いながら、環太平洋の異文化と交流を深めるというものであり、まさに学校教育の一環として、生徒たちに経験して欲しいと思えるものでした。大会への出場が決定し、生徒達が純粋に練習に打ち込むことで、生徒同士、更に学校や社会との繋がりを深め、前向きに変わっていく姿がありました。

それぞれの状況、環境の中、悩み苦しみ意見の相違などでケンカしたりしながらも、納得いくまで話し合い、自分達らしさを活かした魅力を作り上げていく中、心がひとつとなり、「絆」を感じたことと思います。

大会では、全国から集まった同じ志をもつ高校生達の演技が繰り広げられ、その純粋さ、ひたむきさに、多くの人が感動を与えられました。同じ楽屋になった現地の高校生から、福島に来たことの記念になればと贈り物を頂き、温かい心、震災の復興を祈る心を改めて感じ、受賞という結果を残すことができたこと以上に、実り多き経験となりました。参加した生徒は、自分にもできるんだという自信と、ただただ感謝の気持ちに包まれたといいます。

生徒達が、少しでも興味をもつことができる新しいことには、勇気をもってチャレンジして欲しいです。自分の可能性を広げることへ、かけがえない喜びを感じることができれば、自分の未来に大きな役割を果たすことは間違いありません。学校生活では常にベストを尽くし、その瞬間をエンジョイして欲しいと願います。

(関東学院中学校高等学校)





大学からの報告

「東日本大震災復興支援ボランティア」

通称「震災ボランティア」活動も今年で5年目を迎えました。避難所での支援活動から、応急仮設住宅での支援活動へ。そこから、次のステップになかなか進めませんでした。一方で、南三陸町の市街地は土盛りが続けられ約10メートルのかさ上げ工事が進んでいます。高台のあたらしい住宅地も完成に近づいています。おそらく2016年度には、あたらしい南三陸町が姿を現すでしょう。

私たちの活動も、瓦礫処理から住環境の整備支援、そして地元の皆さんへの寄り添い活動へと進んできました。今年は、バーベキュー、流しそうめんそれに恒例の食事交流会を行いました。その間、もちろん現地での生の声を聞き、被災の爪あとを記憶にとどめる活動も欠かせません。この一連の活動が「人になれ 奉仕せよ」の校訓実践の場につながることを願って止みません。

「夏季集中ボランティア」

通称「夏ボラ」には昨年度から参加しています。東北学院大学が事務局になっている全国の100近い大学の「大学間連携災害ボランティアネットワーク」の活動。今年は8月13日から15日の、宮城県石巻市雄勝町での活動に、本学から学生2名、職員1名が参加しました。雄勝町では、雄勝湾での灯籠流しのお手伝いをしました。灯籠作りから、湾内での灯籠流し。翌日の、灯籠回収まで、全国各大学から集まった28名の学生が、多くのボランティアと共に汗を流しました。

「復興支援インターン」

復興庁後援の復興支援インターンには2014年夏から参加しています。全国の大学生が、被災地の各企業に約一週間、インターンとして勤務し、復興に向けて頑張っている被災各地の企業の現状を理解すると共に、大学生の斬新な意見を各企業経営に生かしてもらおうという試みです。多くは、水産加工業でしたが今年度は、南三陸町の景勝地「神割崎」のキャンプ場に本学インターン学生4人がお世話になりました。

「図書館司書課程復興支援ボランティア」

昨年から、図書館司書課程の学生有志により行われている被災地支援活動です。今年は、岩手県岩泉小学校にボランティア学生3人がお手伝いに行きました。岩泉小学校自体は被災をしていませんが、小学校の周辺には多くの仮設住宅があり、避難中の児童が多く通学しています。狭い住環境、津波により失われた書籍。それを補う学校図書館は、とても大切な存在です。学生たちは、少しでも子供たちが喜ぶように一生懸命図書の整理のお手伝いをさせてもらいました。

(関東学院大学)

編集後記

名 称	製作会社	鍵盤数	stop 数	pipe 数	設置年
関東学院中学校高等学校	シュッケ社(ドイツ)	2MP	9	564	1983
関東学院大学人間環境学部礼拝堂	G.ヤン社(ドイツ)	3MP	33	2459	1989
関東学院大学八景礼拝堂	草苅オルガン工房(日本)	2MP	11	750	1990
関東学院六浦中学・高校礼拝堂	須藤オルガン工房(日本)	2MP	13	—	1996
関東学院小学校	草苅オルガン工房(日本)	—	—	—	2016
日本バプテスト同盟霞ヶ丘教会	ヴァルカー社(ドイツ)	2MP	9	655	1991

「ニュースレター No.19」をお届けします。今回は「関東学院とパイプオルガン」をテーマに編集しました。

本年は関東学院大学（金沢八景キャンパス）礼拝堂のパイプオルガン設置25年を迎え、8月～9月にオーバーホールが行われました。学院改革推進5カ年計画支援事業の一つにそのオーバーホール事業が採用され、当パイプオルガン製作の草苅オルガン工房により実施されました。

このパイプオルガンは1990年3月、燦葉会（関東学院大学同窓会）より、多額の募金と多大なご尽力を得て寄贈されたものです。それ以降、大学のシンボルの一つとして、毎週の礼拝、チャペルコンサート、大学、学院の諸式典、行事における奏楽と賛美として活用され、美しい音色を今日まで奏で続けてきました。

元は異教的な楽器に過ぎなかったパイプオルガンがキリスト教会に取り入れられ、高度の発展を遂げ、17世紀～18世紀のバロック時代にオルガン音楽の全盛期を迎え、その頂点に立つのが、J・S・バッハです。キリスト教の伝統を継承する関東学院は毎週の礼拝で、パイプオルガンは荘厳な音色を鳴り響かせ、神を賛美し、趣のある雰囲気や礼拝堂内にかもし出しています。

国内にパイプオルガンは約1000台、教会、学校、その他に設置されてあるそうですが、そのうち本学院内にはパイプオルガンが5台（小学校制作中）あります。パイプオルガンは他の楽器とは異なり、設置される場所に合わせたスタイル、大きさ、他を考慮し、財政面の制約の中でオルガンビルダーは製作することです。

今回の「ニュースレター No.19」編集にご協力いただきました、製作者の草苅徹夫様（草苅オルガン工房の代表）、「キリスト教と音楽」と題して講演下さった植木紀夫教授（桜美林大学）、学院関係の皆様には、ご多忙の中、執筆に心より感謝します。

今後も、学院内の各学校がパイプオルガン演奏による豊かな礼拝を捧げ、キリスト教に基づく人格教育と地域貢献の使命を十分に果たされることを期待しています。

関東学院 学院史資料室
事務室長 鳴坂明人

学院史資料・情報提供のお願い

卒業生、修了生、元教職員の皆様には学院に関する資料・情報の提供をお願いいたします。現在の教職員の皆様には各学校、各部署等で発行されました刊行物を一部、学院史資料室にご寄贈くださいますようお願いいたします。また、各所で作成されたのち、既に保存期間を超えたか、不要になっている過去の書類、機器・備品、写真などにつきましても、情報を提供していただけますようご協力をお願いいたします。（関東学院 学院史資料室）

〔「関東学院と賛美歌」(その1) 16頁からの続き〕

～ A・A・ベンネット宣教師夫妻作詞・作曲の賛美歌を中心に～

次に日本基督教団讃美歌委員でもある川端純四郎氏の著作『さんびかものがたり V 平和の道具と信仰生活の歌』から該当箇所を引用する。

ベンネットは文学的才能の豊かな人でした。メラの『スケッチ』には彼の詩が10編ほど掲載されています。「しづけきタベの」もその中の一編です。メラは音楽の専門家で、神学校でも教会でも賛美歌を教えることに熱心でした。1886年にはベンネットはメラの協力を得て英語賛美歌集を編集出版しました。横浜第一浸礼教会の毎週日曜日午後の英語礼拝のために作られたものです。その中に「しづけきタベの」の英語原詩が初めて掲載されました。1896年には、ベンネットはネイサン・ブラウンが未完成のまま残した日本語賛美歌の事業を完成させて『基督教讃美歌集』を出版します。その276番にこの賛美歌の最初の日本語訳が掲載されています。作曲はメラによるもので「タベの光」という旋律名がつけられています。第一節は次のようになっています。

「天のちちよこの ゆうべのしづけき
しらべにあはせ うたはしめよや」

1903(明36)年の最初の教派共通賛美歌集、いわゆる明治版『讃美歌』の12番に収録された時に改訳されて、

「しづけきゆうふべの しらべによせて
うたはせたまへ ちちなる神よ」

となります。以後、1931年版、1954年版と受け継がれて『讃美歌21』でも、基本的には同じ歌詞で多くの人に愛唱されています。(中略)

明治の終わり頃とされています。ベンネットへの感謝の集いが開かれた時に、バプテスト教会の賛美歌作詞者として知られている藤本伝吉(1867-1935)がベンネットへの感謝の思いをこめて歌ったのが、『讃美歌21』98番「みどりの牧場に」です。その第二節はこのように歌われています。

ベンネットが編集した「基督教讃美歌」(二八九六年刊)と、彼が作詞し、夫



「人足たえたる 荒野のはらにも、
まよえる羊を 子のごと尋ぬる そのこえ。
神のひとよ、神のひとよ、
豊かなみ恵みあれや」

この賛美歌には、だれのことを歌ったのかは記されていません。それと同じように、ベンネットの名前は隠されても、その働きと、その果実は、いつまでも日本の教会に生き続けていくことでしょう。

(以上、『さんびかものがたり V 平和の道具と信仰生活の歌』より)

横浜外国人墓地のベンネット宣教師の墓碑には、“He lived to serve.”(彼は奉仕するために生きた)と刻まれている。師の誠に謙遜な人柄を端的に表している。

この歌の3番に「日ごとわがなす 愛のわざをも、ひとに知らさず、かくしたまえや」とあるが、この節も同様に愛と奉仕の人であった彼の人となりを示している。

このような人を創設者にもつ関東学院は仕合わせである。学院各校の校訓「人になれ 奉仕せよ」に生きた生涯を送り、“He or she lived to serve.”と言われるような人生を歩めるよう、神様に祈りたいものである。

〔関東学院調査役(キリスト教教育活動支援担当)

瀬沼達也 編著〕

KANTO GAKUIN Archives

関東学院学院史資料室 ニュース・レター 第19号

発行日 2016(平成28)年3月10日

発行人 関東学院 学院長 小河 陽

編集 『関東学院学院史資料室ニュース・レター』編集委員会

〒236-8501 横浜市金沢区六浦東1-50-1

TEL. 045-786-7066 FAX. 045-786-2932